

第二章 土田杏村の「使命」自覚への過程

それではまず、土田杏村（以下「杏村」と記す）がその生い立ちからどのような経緯を経て、評論活動に入っていったのかを確認しておきたい。杏村の生涯全般については、既の上木敏郎が、杏村を直接知る人々の証言や杏村に係する書簡類を丹念に集めた研究を発表している⁽¹⁾。そこで本章では、上木が収集した証言も参考にしながら、幼少年時代から京都帝国大学時代（以下「京都帝大」と記す）までの杏村に焦点を当てることにしたい。というのも、後に杏村が社会改造を目指した広範囲の評論を発表ようになる大きな原因が、京都帝大在学までの彼の半生にあったからである。

その原因は彼のアイデンティティと関係があった。少年時代から築かれてきた杏村のアイデンティティは、青年時代に崩壊の危機をむかえる。そして、京都帝大入学前後に、その危機を乗り越えた杏村は、彼の「使命」の自覚にまでたどり着く。では、当初の彼のアイデンティティはどのようなものだったのか。なぜそれは危機をむかえたのか。さらに、彼が到達した「使命」の自覚とはどういうものだったのか。

第一節 幼少年時代 - 「つよい決心」をもつ「神童」 -

杏村（本名土田^{つとむ}茂）は、1891（明治24年）年1月15日に、佐渡のほぼ中央部に位置する新潟県佐渡郡新穂村大字井内三七二番地に生まれた。父親は千代吉、母親はクラ、長兄英治、次兄は後に日本画家の土田麦僊となる金二、杏村はその三人兄弟の末弟であった。土田家は代々農業を生業としていたが、千代吉は、家業のそれだけでなく村政にかかわって地元の農政改革に功績をあげ、さらに郡の農業振興にも尽力した。彼は、政友会に所属し、県や郡の政界とも関係もっていた。ただ、かつては「郷党の三豪家」のひとつと呼ばれるほどの裕福な土田家ではあったが、千代吉が政界に奔走することで家財が傾き、その頃は決して楽な暮らしではなかったようである。

そうした家に生まれた杏村は、自分たち兄弟の名前の由来について、「実名は何れも簡単な字である。父が地方の政客であつたから今後子供が政治界へ立つ時には、むづかしい字の名前では選挙に不利だと思つてさうした簡単な字にした、と私達によく話したのを記憶してゐる。しかし私達のだれもが政治界へ出なかつたのは、よい皮肉であつた」⁽²⁾と語っている。生まれてすぐの子どもに対して、自分が携わっていた経験からか、将来政界に進出することに配慮した命名をおこなう千代吉は、随分と彼らに期待をかけた父親であつたと思われるかもしれない。しかし千代吉の場合は、だからといってそうした自分の期待を子どもたちに押しつけたりはしなかつたようである。杏村は、「父は、子供の将来の方向について一つも拘束しなかつた。父の希望してゐるのは、偉大な政治家であつたらうが、兄が画の方へ進むとしても、さう進めばさう進むで、ただその将来の発展を悦んでゐた」⁽³⁾と語っている。それでも、千代吉は子どもたちを放任していたわけではなく、彼らの教育には熱心だつた。杏村によると「古武士」のようであつたとされる父千代吉の子どもたちへの教育は厳しいものであり、杏村たちの方も、そうした父の教育に応えるかのように、授業中には教師の言葉を一言でも聞きもらさないように集中し、学校の図書室の本をすべて読破したと言われるほど勉学に励み、抜群の成績をとっていた。杏村は、「私共兄弟は、幸ひ学校などでは他の子供とちよつと掛け離れた天分を發揮して神童のやうにいはれてゐたし、(田舎のことだから元より珍しいことではない)兄の画才などは非常に天才的な不思議なものであつたから、小さな子供の時に、将来日本で有数の画家や学者になるのが、もう定まつた運命であるかのやうに思ひつつ成人した」⁽⁴⁾と当時を振り返っている。ただし、杏村たちがもっていた、他の子どもたちから「掛け離れた天分」は、学校の成績についてのみ發揮されていたのではない。

杏村は、後に彼が結婚する女流歌人波多野千代子(以後「千代子」と記す)に送った手紙(1917(大正6)年7月22日付)の中で、父の教育について次のように書いている。

それはそれは厳格な教育でした。おまつりを見に行くにも私等はふだん着で行かせられて〔中略〕少しでもいい着物がほしいやうな顔を見ると父が恥づかしめました。そしてお小遣さへ持つてゆきませんで、母がこつそりくれましたが、それさへ使はんで帰つたものです。父はその時、『お前達はあたりの子供

の方が余計お小遣を使ふやうに思ふだらうが、あれはあれつきりのことで、お前達はこれから十何年といふものお小遣がいるんぢやあないか。今からお祭へいつてお菓子たべて喜んで満足してゐるやうなことでこれからのお小遣を貰ふ資格があるか』といひました。京都にゐる兄〔麦僮〕といひ、一家から二人まづ相当の人間が出たのは全く父の教育のお陰です⁽⁵⁾。

その時だけの学業が重要なのではなく、将来を見据え、十何年先に高等教育にまで進むことを当然のことと見なして、父は杏村ら子どもたちに厳しい教育をおこなっていた。またこの手紙では、母クラについてもふれられている。千代吉とくらべて、

母は全く反対の趣味の人で器用な人でした。学問は出来ませんでした。貴族的であつた人です。兄も僕も画がかけるのは、多分母の血統をひいたでせう。母は画はかかなかつたが、趣味が高尚でしたから。それで僕等も一方では高尚にと育てられたのです⁽⁶⁾

と、杏村は記している。こうした父母のもとで、子どもたちは質素に厳格に育てられると同時に、家の経済的事情の許す限り本を買い与えられる（それは年に一回の虫干しの日に干し切れないほどになったそうである）など文化的に豊かに高尚にも育てられた。そうした家庭環境の中で杏村は成長した。そして、あたりの子供とはちがっていた杏村はまた、将来日本有数の学者になることを、周囲の眼からなる「もう定まつた運命」としてだけではなく、自分自身の「つよい決心」としてもいた。杏村は次のように回顧している。

私は小学校の時から、何処までも学者になつて立つて行くつよい決心を持つてゐたのである。さうした学者となつて十分に立つて行くに相違無い自信を、私はそのころからいささかも疑はずに、はつきりと持つてゐたのである。すべてはこの意志の力によつて決定せられると思ふ。併し私のこの意志が養はれたのは、私の父母の意志が同じ様に固かつたからであつた。父母がさうした意志を持たなければ、私は家庭の中にあつてそんな意志を持つやうになつたかどうか分らない事だ⁽⁷⁾

周りから「神童」のように見られていた杏村ではあるが、この回顧の通り彼自身が小学校時代から学者となる「つよい決心」をもっていたのであれば、学校の成績で「天分」を発揮していたことよりも、そのことのほうが彼の「神童」たる所

以であったといえるかもしれない。というのも、単に学校の成績が優秀であるよりも、すべてを決定する「意志の力」、それほど強い意志の力を幼くして確信することができて、さらに成長する途中でその確信を失ったり、決心がゆらいだりすることなく、持続しながら自らの進路を進むことの方がよほど難しいことではないかと考えられるからである。

この「意志の力」にかかわるようなエピソードがある。杏村の通った新穂高等小学校の後輩田辺汎は、杏村が同級生からいじめにあったのを目撃したそうである。田辺はその時の様子を、「其の時氏は敢えて逃げようともせず、また哀憐を求めようともせず、毅然たる態度で着物の前の乱れるのをおさえて、なすがまゝにまかせていた」⁽⁸⁾と語っている。そして田辺は、この時のいじめの原因を、杏村の学校での成績が良いことが妬まれたのではないかと推測している。田辺の記憶および推測が正しければ、杏村がこうした態度をとることをできたのは、彼が、少々のいじめなどには屈しないことを可能にする「意志の力」を確信し、その力に支えられた志をもって自分の将来を見つめていたことによるのかもしれない。また、たとえ子どもにでも、高等教育へ進むことを理由に、祭りの小遣いをもらう資格があるかとたしなめる父千代吉の厳しさは相当のものだが、それに対して、せっかく母親からこっそりもらった小遣いさえ使わなかった杏村たちの辛抱強いこともかなりのものであろう。そうした父と子どもたちのそれぞれの強さは、やはり意志の固さに起因すると思われる。千代吉が、自分の期待とは違って、子どもたちが政治家にならずに学者や画家になっても喜べたのは、強い意志の力を養うようにおこなった父母の教育の目的が達成されたからと理解できる。そしてこの後実際に杏村は「決心」の通り学者への道を歩き始める。

ここで杏村の大学入学までの学歴をまとめると次のようになる。

1897（明治30）年 4月 新穂尋常小学校に入学。

1901（明治34）年 3月 同校を卒業。

同年 4月 新穂高等小学校に入学。

1905（明治38）年 3月 同校を卒業。

同年 4月 同校補習科に入学。

1907（明治40）年 4月 新潟師範学校に入学。

1911（明治44）年 3月 同校を卒業。
同年 4月 東京高等師範学校予科に入学。
1912（明治45）年 4月 東京高等師範学校本科博物学部に進学。
1915（大正4）年 3月 同校を卒業。
同年 4月 同校研究科に学籍をおく。
1915（大正4）年 9月 京都帝国大学文科大学哲学科に入学。

この中で、1905年3月に新穂高等小学校を卒業したあと、同年4月に同校補習科に入学しているのは、この時杏村が師範学校入学資格年齢である十六歳にまだ達していなかったからである。新潟師範学校入学後、杏村は自分の考えを公に発表し始める。

第二節 新潟師範学校時代 - 懐疑的思考の萌芽 -

1907（明治40）年、杏村は、最年少でしかも最優秀の成績で新潟師範学校（以下「新潟師範」と記す）に入学する。当時の彼はどのような学生だったのか。同級生だった小柳信助は、「土田君は、友を避けるわけではないが、進んで友を求め方でないから、ひとり読書をしたり、倦めば画を描いたりして居ったのでしよう。〔中略〕運動は全くせられなかったようです。頑健という方ではないが、さりとて病弱という方でもなかったようです」⁽⁹⁾と回想している。また、新潟師範で杏村の国語を担当した井上桂は、「彼は天才的な頭脳の持主で、群衆を抜きんずる処があるのですが、それを鼻にかけて誇視するような事はなく、只なんとなく底光のする存在として注意をひくのでした」⁽¹⁰⁾と述べている。こうして他の生徒とは一線を画すように独自の生活をおくる傾向のあった杏村だが、彼は周囲の者と交渉をもつことをまったく避けていたわけではなく、積極的に各種の会に参加していた。杏村は、校内の短歌の会であるウシホ会や、宗教研究の会であった求道会に入会して活動している。さらに、校外では地元の新潟新聞が主宰していた俳句の会にも入会していた。1910（明治43）年には、新潟市内の学校弁論大会で、「平凡より脱却せる天才主義」という題で演説をおこない、一等賞になっている。このように杏村は、演説をはじめ、自分の考えを深めたり表現したりす

る活動を好んでいたようである。彼の歯切れの良い演説は当時有名だったが、後輩の山岸徳平が、一人で海へ行って演説の稽古をすることを杏村本人から聞いたと言っているように⁽¹¹⁾、そうした活動について杏村は、労を惜しまず、ただし集団活動よりもひとりで努力する学生だったと思われる。また、入学後も成績は良かったが、杏村は、上級学校の授業になっても、学校の勉強に汲々としていたわけではなかった。それについて小柳は、「三年生の頃でしたか、試験の前に呼びに行ったら、外の者は試験準備に忙殺されて、余裕ありませんでしたが、杏村君はその日陰に、教科書以外の高師あたりで学ば様の本を読んで、試験など何処吹く風という、余裕綽々たるものでありました」⁽¹²⁾と語っている。こうして当時の杏村は、小学校時代からかわらず成績優秀で、文化的な活動にも参加しながら学校生活を過ごすと同時に、やや孤高な学生としての生活を送っていた。

ところで、杏村の新潟師範在学中、新潟地方にいわゆる「入信問題」が起こっている。この問題は、東本願寺派の僧侶清沢満之がおこなった一種の新興宗教的運動に端を発する。清沢は1900（明治33）年に東京に浩々堂を開き、雑誌『精神界』を刊行して他力信仰を唱道した。1903（明治36）年に清沢が没した後もこの運動はその後継者たちによって続けられ、それはやがて全国的な支持者を得るまでになった。新潟地方でも特に若者を中心として影響を受ける者が増え、中等諸学校の職員や生徒にも入信者が続出するに至って、当地の教育界でもそれが問題とされることになった。この問題について、杏村は新潟新聞紙上に論評を発表している。そこには彼の「懐疑的思索」が示されていた。

それによると、宗教の出発は「万物の現象に対する戦闘・憧憬」であり、さらにそこから人間の力では抗うことの敵わない自然を認め、畏怖し崇拜したものが宗教心である、と杏村は主張している。この原始的な宗教心が進化して、英雄崇拜となり、また多神教が神（ゴッド）とも如来ともなった。そうした唯一絶対神を組織し上げたのがキリストであり釈迦であって、彼らキリストや釈迦は、「無尽蔵なる知識をもって宇宙の真理を究め尽くし、あらゆる懐疑、あらゆる煩悶を消去して大悟徹底の域に入ったのちに、その深遠なる教義を説いた」⁽¹³⁾と杏村は説明している。そして杏村は、そのようなキリストや釈迦とは違い、一般信者が入信する経路は「知的」でなく「情的」であると見なしていた。彼ら一般信者

が欲するのは、「知の解決という満足」ではなく「情の愉悦」であり、また「宇宙不可思議に対する解決という煩悶」ではなくて「人世の苦悩を脱する目的」である。要するに、こうした一般信者の信仰について、杏村は、「知的認識は釈迦・キリストに一任して、自己はただその認識した哲理・唯一神を信ずるにある。知的作用は他にあって自己には苦悩の脱却という感情のみある」⁽¹⁴⁾ととらえていたのである。

ただしここで杏村は、一般信者のすべてがキリストや釈迦のように「知的」になるべきといているのではない。杏村は、はたしてそうした「情的」な信仰が、懐疑を思索の出発点としている近代人の信仰になり得るかどうかと疑問を呈するのである。「生老病死、それ自身が直接に我を苦しめる情の痛さよりも、生老病死そのものについての認識解決の煩いの方が自分には適切に感じて来る」⁽¹⁵⁾と述べた杏村は、自分の「認識解決の煩い」を近代人に共通のものと考えている。この「煩い」は、諸々の既成概念への「懐疑」から生じている。懐疑から考え始める近代人が信仰を希求する時、知的認識は人任せのままで済むものではない。その認識に関しては、釈迦やキリストの所説でさえも疑いの対象となり得るはずである。こうした観点から杏村は、「懐疑より出発して自己の哲学的良心を欺かざる、また自己の行為に甚大の意義在る宗教とは何だろうか。自分は敢えて言う。懐疑より出発して自己の哲学的良心を満足する断案を意志に実現したるもの、これ宗教なり」⁽¹⁶⁾として、近代人に必要な宗教は絶対他力教のようなものではなく、「自己の哲学的良心」の満足できるものであるべきと主張している。この時の杏村は、宗教と哲学をまったく別のものとは考えてはいない。彼にとって、哲学は理性的に客観的断案を下すものであり、宗教は意志的に自我を体得するものであった。そして、懐疑から始まる思索をおこなう近代人の苦悩に対処するには、そうした哲学と宗教の両方が要求されている。

したがって杏村によれば、絶対他力教は、それが説く「他力なくして自己の力はない」「自我即ち他力」などの教えだけでは近代人にふさわしい宗教とはいえない。絶対他力教では、他力の一切を恩恵と感じ、他力の根源が混沌とした宇宙、またはその混沌の支配者に帰される。だが、宇宙を人の手の及ばない混沌ととらえ、人の行為をことごとく如来の所作であると断じてしまえば、人世の意義や理想は何か。また、責任の主体や自由な意志活動をおこなう主体などはどこにある

というのか。さらに、絶対他力教の教えのように人々が他力を恩恵と感じるとしても、そう感じるためには、第一に感じる主体がなければならない。そして、その主体とは、自我という考えがあってはじめて生じるのではないのか。杏村には、懐疑することなしに他力にすぎらのみの宗教が、「麻醉剤に酔い、阿片の甘夢に自己を忘却したるもの」⁽¹⁷⁾に映るのであった。

こうして絶対他力教を批判する杏村は、「懐疑」を自らの思索の起点とすることについて次のように語っている。

顧みれば人類の懐疑はほとんどその本能性なり。我は我が宇宙が到底解決せられずと教うるも、なお手をつかねて傍観する能わざるものに候。努力という意識の存するかぎりには於いて、余は余が懐疑を続けたきものに候⁽¹⁸⁾

先にあった「つよい決心」として、杏村は、将来学者になることをめざしていた。生涯「懐疑」を続けたいと欲する杏村にとって、学者がそうすることを仕事とするのであれば、彼の選択はこの上ないものといえるかもしれない。また、そうした人類の「本能性」に近いとされる「懐疑」についての自分自身のとる姿勢だけでなく、さらには一般の人々に対しても「懐疑」を出発点とする必要を唱えた次のような記述がある。

我等は科学そのものに多大に信頼をして居る。実際科学に信頼しなければわれらの生活はブーアなものとなるからである。しかしながら、我等はその真理なるものに向かっても、遺憾ながら全部の自我を投げ出して以て信頼するにはやや飽きたらない感がある。科学は自我の一部の統一だ。未だ全部の自我の統一ではない。文芸と倫理とが自我の両側面で半衝し合うという次第である。我等はここにおいてか哲学を希求せざるを得ない。而してその哲学や科学や根本的に懐疑をもって出発点とする⁽¹⁹⁾

ここからは、杏村が、ちょうど宗教の意義を認めつつも絶対他力のように宗教に全面的に依拠することはできないのと同じく、科学的・客観的な真理の意義を認めつつも、それを唯一の絶対的な真理として受け入れることができないと考えていることが読みとれる。仮に科学的な真理が確かにひとつの真理としてあったとしても、それを認めることができる主体・自我とはなにか。もしも、自然現象を支配するなんらかの真理があり、それが人間にもあてはまるものであったとしても、そのことによって直ちに「全部の自我を投げ出して」それを受け入れられる

わけではない。なぜならば、その真理の発見は、自我をもつ人間によるからである。もしも真理が自我のはたらきを左右するほどのものであるならば、真理の発見は、結局はその真理の所作となってしまう。また、もしも真理の普遍性が認められ得る場合でも、その真理を全面的に受け入れるか否かは自我にかかっている。「科学は自我の一部の統一」をなし得るが、それは「一部」のことであって、杏村は、科学に担えない部分もあると考えていた。そこで、生活を豊かにする科学の真理であっても、それに頼りさえすればいいということにはならない。杏村は、自我の全体的な統一のための思索の基盤を哲学に求める。このことは、彼が、その後終生論じ続けることになる人生問題・社会問題に、深くかかわる哲学的考究の始まりであった。そして、まだ師範学校に学ぶ学生であったが、この時既に杏村には、懐疑から始める哲学的態度が具わり、その態度にもとづいた懐疑的発想・思索が発揮され始めていたといえるであろう。

ただし、その「懐疑」は決して十分なものではなかった。というのも、この時点での杏村の「懐疑」は、理性のはたらきを信頼して思索を深めることで問題の解決に至ることができるという、一種の主知主義的な「懐疑」だったからである。また、その「懐疑」は、あらゆるものを対象とするはずなのに、実際には杏村自らに向かうものでもなかったからである。「懐疑」をおこなう自分自身への「懐疑」はこの時の彼には見られない。そしてそれらのことによって、やがて彼は大きな矛盾をかかえることになる。

第三節 東京高等師範学校時代 - 「他ヲ軽視スル」杏村 -

新潟師範在学中には主に文科系の方面で活躍していた杏村であったが、東京高等師範学校（以下「東京高師」と記す）に進学するにあたって、彼は博物学を志願している。このことは周囲の者にとって意外なことだったようで、小柳は「土田君が^{ママ}会博物科に入学されたのには、驚かされてしまいました。土田君の在学中、植物採集や昆虫採集をして居られたのを見たこともなく、その方の学科を日頃好んで居られた様子など全く知らなかっただけに、私一人だけではなく、同級生がみんな驚きの声を発しました」⁽²⁰⁾と述べている。予想外の杏村の博物学選択の理

由について、新潟師範で杏村の数学を担当した土居音三郎は、「文科とばかり思っておった私には意外であった。『君が理科方面に進むのか。そんなら、博物科よりも、物理化学とか数学にした方が良くはないか。』」といって、彼曰く、『私は先輩に高師で一番勉強しないで卒業の出来る学科を調べて貰いました所、博物学科ということで、それに決めました。』又曰く、『私は自分の勉強がしたいから時間が欲しいのです。高師を卒業したら、すぐ京都大学に入学しますから、高師の学科などなんでもよいのです。』と。私は彼のプランの非凡なのに驚いた。彼はそのプラン通り進んでいった⁽²¹⁾と語っている。また、土居のはなしとは別に、この選択の理由について、杏村自身は、小学校時代の恩師藍原五三郎に宛てた手紙（1910（明治43）年1月16日付）の中で、「高師では博物を志願する心算です。これについてもよほど考へたのでありまして大いに理由を有して居るのであります。要するに人そのものの解釈から哲学にはいりたいのが小生の学に対する最終の目的です。それをなす以前に於いて発生学に殆ど身を委ねる考へです⁽²²⁾と自分の考えを記している。土居の記憶にある自分の勉強のために「時間が欲しい」からだったのか、それとも、藍原への手紙にある最終目的に至る前に「発生学に殆ど身を委ねる」ためだったのか、そのどちらが杏村の選択にあつたのかの本心だったのかははっきりしない。ただ、そのどちらであつたにせよ、杏村は、東京高師入学前から、ゆくゆくは京都帝大に進学する、哲学を学ぶ、など卒業後のことまで視野に入れ、当初のプラン通り学者に向かって進んでいた。

1911（明治44）年に新潟師範を開校以来抜群の成績で卒業した杏村は、東京高師の予科に入学した。その時も成績の良さは相変わらずだった。土居は、以前にもましての杏村の優秀さを示すエピソードを語っている。それによると、杏村が入学した時の東京高師の入学志願者は三千数百名だったが、その中で新潟師範の卒業生が一番と三番を占めた（一番が杏村）。この結果に驚いた東京高師の嘉納治五郎校長は、新潟師範では何か特別な指導をしているのではないかと考え、そのことを調査すべく入れ替わり立ち替わり東京高師の教師たちを新潟師範に視察に送った。しかし、新潟師範では入学試験のための特別な指導などしておらず、また特に傑出した教師がいたわけでもなかった。土居は、「ただ、土田君が非常な天才であつたことと、そのために周囲のものが引き上げられて好成绩をおさめただけのことである⁽²³⁾と説明している。

予科を含めた東京高師時代は、杏村にとって、演劇や音楽の鑑賞に出かけたり講演会に出席したりして東京の文化を体験し、学業以外にも見聞を広げた時代であった。そして同時に、この時代は、杏村の志の中にある非常に大きな問題が明らかになった時代でもあった。

当時の杏村の自負がこの年の日記の巻末に記された手記から見てとれる。それは次のように書かれていた。

世ノ薄運ナル者ヲアハレメ。汝ノ天職ハ社会ノ改革者也。教育界ノ彗星也。汝科学ト芸術ト道德トヲ一丸トシテ汝ノ哲学ヲツクリ、汝ノ周囲ヲ清浄ナラシメザル可カラズ。汝ハ遂ニ社会ノタメニタホレザル可カラズ。薄運ナル労働者ヲ見ヨ。薄運ナル犠牲ノ女性ヲ見ヨ。〔中略〕義ヲ見テセザルハ勇ナキ也。弱ヲ扶ケ強キラクジクハ男子ノ本領也。〔中略〕名誉ノタメニ翻弄セラルル勿レ。〔中略〕権勢ト富トハ汝ガ社会ニオケル活動上全ク必要ナラザルニアラザルモ節ヲ屈シテナホ得ントツトムル勿レ⁽²⁴⁾

さらにこの手記の六年後、杏村が千代子に送った手紙（1917（大正6）年8月14日付）の中には、次のように記されている。

社会には不幸な人が多い。それをどんなに僕が気の毒に思つてゐるか知れない。父は生涯そのために戦つた。戦つて死んだ。政治家にしようと思つた父の希望は二人の子によつて裏ぎられたが、僕だけは流石に父の血を受けて、社会的反抗の気分はつよい。そしてどんなにも不幸のもののためにつくさうと思ふ

⁽²⁵⁾

これらふたつの資料を見ると、幼くして杏村の抱いた志がこの頃にはより具体的になって自覚されているように理解できる。「社会ノ改革者」を自分の「天職」と見なす杏村は、社会改良に尽力した父千代吉の意志を継いで、不幸な人々の救済を自らの志としていた。ただし、杏村は、その志を以上のふたつの資料が書かれたの間、つまり1911年から1917年にかけての六年間に、一貫してもち続けていたわけではなかった。前者の手記と、後者の手紙に記されたそれぞれの志は、同じように「世の不幸な人たちのための社会改革」をめざすことのように見えても、それらは質的に異なるものであった。というのも、前者の志において、社会的弱者の救済の必要を語る杏村は、同時に、「他ヲ軽視スル」杏村でもあったのであ

る。

1912（大正元）年、当初の予定通り杏村は本科博物学部に進学する。この時の東京高師の教授陣には、丘浅次郎、高倉卯三磨、山内茂雄、斎田功太郎、稲葉彦六、佐藤伝蔵らがいた。当時の東京高師は優れた教授の確保に力を入れており、全国的に人を求めて帝国大学にも引けを取らない教育者を揃えようとしていた。そのために尽力していた嘉納校長は、東京高師の教授が帝大に転任するたび、涙を流さんばかりの寂しがりようであったと言われている。そうした教授たちの中でも、杏村は特に丘に対して敬服していた⁽²⁶⁾。専攻こそ博物学であったが、談話部に所属し（一年上に務台理作がいた）、校友会雑誌に精力的に論文を発表するなど、相変わらず文科系の活動にも熱心にかかわっていた杏村は、1913（大正2）年、本科二年生の時に、「街頭の哲学者」と称される田中王堂（以下「王堂」と記す）⁽²⁷⁾に弁論部の大会での講演を依頼した際、その交渉に当たって彼の知遇を得た。杏村は王堂に傾倒し、二人はその後長く関係をもつことになる。東京高師の後輩石田茂作が「寄宿舍で土田杏村と云えば誰れしらぬものはなく、学生でありながら著書があることでも有名で、私にとっても科は違っていたが羨望のまゝであった」⁽²⁸⁾と語っているが、ここで石田の言う杏村の「著書」とは、時期的に考えると、1914年に刊行された『文明思潮と新哲学』のことであろう。これは、杏村が東京高師の校友会雑誌に発表した論文をまとめたもので、王堂がその刊行を斡旋した作品である。

このころの杏村はどのような学生だったのか。前書の刊行と同年の1月、雑誌『雄弁』に大学別の弁論部部員の評が載っている。そこでは杏村について、「恐ろしく論理的な頭脳を持つた君は演説に於ても実に冷静である極めて論理的であるだから聴者の情に訴えずして直ちに頭へ訴える、その鋭い論理に於ては恐らく当部に類を見ぬ処であらう、〔中略〕君は自ら熱する事が^{ママ}六づかしい、君の演説は何処までも科学的であつて感動的でない、〔中略〕内容の豊密なこと通弁の鮮やかな事に於ては云ふ必要もあるまい、只望むところは君自身の感動も相当に加味して貰いたいことである」⁽²⁹⁾と評されている。もしもこの評が東京高師の学生のあいだに共通したものであったならば、杏村は、ずいぶん冷静沈着な学生という印象を周囲に与えていたようである。確かに論理的ではあるがそれと同じく

らい情熱的に語っている後の著作から受ける杏村の印象と比べると、この評からは、やや異なった当時の杏村の姿が伺える。そして新潟師範時代と同じく、他の学生から離れて思索に耽るような杏村だったと推測できる。

だが一方で、杏村は、「自ら熱する」側面ももちあわせていた。東京高師在学中に、彼は静養のために佐渡の旅館に一ヶ月ほど滞在している。彼と同郷の中川杏果（小学校時代にいっしょに号をつけた中川覚治）によると、その時に宿泊した旅館の女中が杏村を崇拜するようになった。ところがその後彼女は東京の吉原遊郭に売られてしまう。そこで杏村は彼女を救い出そうとして精力的に動き、救世軍のところへ相談に行ったり、大隈重信邸へ電話をして面会を求めたりした。だが、彼女の救出はうまくいかず、大隈邸では紹介状なしでは会ってくれさえもしなかったそうである⁽³⁰⁾。この件については、当時の杏村の日記でも触れられていて、「それにしても社会問題の第一に立つものは政治と金だ。あー政治と金。自身の意見が実行せられるためにはこの二者を先づ得ねばならぬのか」⁽³¹⁾という彼の嘆きが記されている。

「あたりの子」とは異なって「神童」のように見られた杏村。成績抜群で、「底光り」する雰囲気をもちながら、他の学生からやや離れていた孤高な杏村。論理的だが感動的ではない弁論を展開する杏村。そして、「社会ノ改革者」としての自負を抱きながら、「政治と金」という現実の前に己の無力を知る杏村。こうして、冷静に世の中を観察し、挫折も味わいながら、社会問題について自らの考えを深める杏村ではあるが、彼には自ら認める欠点があった。先の「社会ノ改革者」を志すことが書かれた手記には、次のような既述がある。

汝ノ欠点ハ從來他ヲ輕視スルコト、他ヲ侮慢スルコト、虚偽ナルコト、名誉權勢欲多キコト、欲望ヲ制御シ得ザルコト、自利の見解ヲ去リ難キコト、猜疑ナルコトナリキ。為メニ他ト融和シ難ク、卑屈ニシテ誤解ヲ受ケ易カリキ。コレガ救済ハ快活ト自重謙讓ト眞実ト犠牲愛他心ト也⁽³²⁾

この文章からは、あまり学友と親しく交わることなく距離を置く杏村の他人への接し方について、杏村自身が、自らにある「他ヲ輕視スル」「他ヲ侮慢スル」姿勢として、そのことを反省的に自覚していたことが伺える。しかも、こうした姿勢が他人との融和を妨げ、誤解を招くかもしれないことも予想できたために、杏村には、「快活ト自重謙讓ト眞実ト犠牲愛他心」という、他人との交わりのため

の意識的な努力が必要であった。それでは、彼はなぜ「他ヲ軽視スル」のか。

1914（大正3）年5月27日から31日まで、東京高師本科三年生の杏村は、学友たちと神奈川県三崎地方へ海草採集の旅に出かけている。その時書かれた「三崎日記」には、当時の杏村の心境が赤裸々に吐露されている。旅行中杏村は、採集をする時以外には一人であたりを逍遥し、友人たちと行動をともにすることができなかった。だが杏村は、友人と交われないことについて、「それを少しも恥辱とは思つて居ない。寧ろ私はそれによつて私の生活の汚されなかつたことを喜んで居る」⁽³³⁾と記している。また、杏村が軽視するのは、友人についてだけではなかった。東京高師入学の時には、周囲の予想とは違って、自らの意図をもって博物学を選択したはずの杏村は、同じく「三崎日記」の中でその博物学について、「海草を採集する、名称を教授から聞く、標本につくる。それで万事をつくしてゐるノメンクレーチュアの博物学がどれだけの意義を持つてゐるのか。我が国の博物学は本草学から進歩したこと幾干であるだろう。科学と生活との一致してゐる私にはこんな無意義の学問はない」⁽³⁴⁾と述べている。友人と交わると自分の生活が「汚され」と考え、また博物学を「無意義の学問」と考える杏村。友人にせよ博物学にせよ、なぜ杏村はこのように周囲を軽んじていたのか。そうした自分自身について、杏村は次のように言い切っている。

私はあくまでも孤独である。私にはそのまま追従して行かうと思ふ先覚もなく、又私と思想の交渉を保つて平行に進んで行かうといふ同僚もない。私はたゞ独りで考へて独りで実行して行く許りである。多くの書物に私の生命を根本から改造してくれるものはなく、多くの人格に私の個性の革命を喚んでくれるものがない。私にとっては私ほど偉大なものはなく、私ほど絶対なものがない

⁽³⁵⁾

こうした不遜とも思える自分自身についての賛美の記述には、さらに自己の孤独さを強調して加味した上で、

孤独の人生寂莫の人生。〔中略〕私の生活は所詮私ひとりが進まなければならないのである。私は弱者であるが今はこの上もない強者となつた。私はもう自らに超人を実現したのである。私みずからの生活ばかりでなくあらゆる他人の生活をも燃焼して行くべき創造の力を今や体得して来た⁽³⁶⁾

とさえ書かれている。さらに、ひじょうに多くの部分が同じ文章で構成されてい

るため、おそらく「三崎日記」に加筆されたもの、もしくはその原文であったであろうと考えられる文章が『新潟新聞』（1914（大正3）年6月13日）に掲載されている。それによると、先の引用文(36)の後には、

進め汝。汝は汝自ら渾然たる芸術品である。汝が畏服すべき何物の権威もない筈だ。汝が準拠すべき何物の標準もない筈だ。進め汝。汝はこの上もなく強いのではないか。汝は自ら権威であり、汝自ら標準である。渾然たる芸術品には何物にも譲歩する余地がない⁽³⁷⁾

という文が続けられていた。杏村は、自分自身で完成した「強者」「超人」であるだけでなく、他人を制する「権威」「標準」とさえ思っていたのだった。こうして、「この上もなく強い」「超人」「自ら渾然とした芸術品」「権威」「標準」と自認する杏村は、他人からすれば傲慢ともとれる自己の絶対性を主張していた。

はたして、そのような自己陶醉といってもいいであろう自分についての描写は、「社会ノ改革者」たらんとする杏村が、自分自身を鼓舞するためのものだったのか。どうやらそうではなかった。「三崎日記」には、次のような興味深い既述がある。

路傍の人の如何に醜きかな。私は常に彼等の顔に於いてあまりに的確と表はされたる人生の彫刻を見るや、愕然として自らを怖るゝことがある。悲惨なる現実の苦闘は何んなに彼等の面を彫刻し、彼等をして取りかへすことの出来ない陋醜を自らに帯びしめたことであろうか。〔中略〕眼まぐるしい現代物質文明の中にあて、私は決してその醜い彫刻を受けたくない。要するに彼等は芸術に生きることが出来ないのである。生活をそのまま芸術化することが出来ないのである。強烈なる自己の個性を主張して、燦たる物質文明を自己芸術圏内に同化する時に、どうして私は自らを享受しないで居られようか。愛するわが肉体よ。汝の面に美はしき貴公子の如き気品あれ⁽³⁸⁾

生活を芸術化できる「貴公子」のような自分、これは、孤独に我が道をゆく「強者」「超人」などと同じく絶対的な自己の自覚の一面として理解できる。だが、「貴公子」のような自分を語るのに、ここでは「路傍の人」が比較の対象とされている。しかも、その「路傍の人」が醜いだけではなく、自分はそうはなりたくない。醜い「路傍の人」とは、人々をそうした状況に追いやっている現実に対

しての、杏村なりの批判の表れととれなくはない。だが、もしもそうであったとしても、批判すべき現実を前にして杏村の持っている態度は、「路傍の人」とは違って、強烈な個性を主張できる「貴公子」としての態度であった。彼らは生活を芸術化することができないが、自分にはそれが可能である。もしもそのことが事実だとしても、ここには、自分と彼らを繋ごうとする杏村の意志や視点が見えない。以前杏村が抱いていた、「薄運ナル労働者」や「薄運ナル犠牲ノ女性」のために「社会ノ改革者」たらんとした志と、この日記に見られる態度は、矛盾していると考えられてもしかたがないだろう。

ただし、こうした矛盾は、当時の杏村にとって不可避的なものであったとも考えられる。新潟師範時代に発表した絶対他力教に関する論文の中で、彼は、恩恵を感じる主体は「自我」という考えがあって成り立つとしていた。それでは、杏村のいう「自我」とはどういったものか。これについて、次のような文章がある。

力そのものが一のまとまりをなして、それ自身の形式では、決して他と交渉のないところに自我が出来ている。まとまりたる個々の形式は決して他の形式と互いに認識をしない。自由なる意志活動をなす主体である。責任の主体である⁽³⁹⁾

たしかに、「自由なる意志活動」をおこなうがゆえにその活動の「責任」も担う「主体」観は、絶対他力に全面的に依存する信仰に対して、有効な批判の視点になり得るであろう。そして、主体を支える「自我」が強固なものであれば、その主体性も強化されるであろう。杏村が「懐疑」という観点を獲得したのは、このような「自我」認識のおかげであったと考えられる。というのも、「自我」が、「他と交渉のない」それ自身で完結した世界に成立しているのであれば、「自我」以外は、すべて「懐疑」の対象となり得るからである。ここで杏村は、まとまった個々の形式の、他の形式に対する相互認識の不可能性を語っている。だが、この時点では、そうした形式の個別性が主張されるにとどまっている。換言すれば、この時点では、個々の形式を統一するような、「それ自身の形式」とは違う、より広範な形式のあり得る可能性を残してはいる。だが、「貴公子」としての自覚の時には、そうした可能性は残されていない。その自覚は、「他と交渉のない」ままに突きつめられた、独我論的な「自我」によるものであった。独我論的「自我」をもつ主体を基準にして自分の周囲の世界を美化すれば、それとはちが

う世界、つまり、現実によって彫刻された「路傍の人」の醜さ、現実によって主体性の抑圧された人々の醜さは明かであろう。そのため、「社会ノ改革者」と自認する杏村は、彼らを救わなければならない。だが同時に、自らを享楽できる「貴公子」であるとも自認する杏村自身は、彼らのような彫刻をされたくはない。また、既に自身は、「絶対的」な「超人」的な自分であるがために、彼らに並ばない、交われない孤独な自己である。要するに、優れた学問的能力・美的能力をもち、人々の中に埋没せず、埋没したくもない杏村は、人々の醜さを認識できる自分であるが故に彼らを救えない。杏村は、こうした矛盾をいかに克服するのか。この時点ではその方向はまだ語られていない。

ところで、この頃（京都帝大進学前）までに示されていた杏村の教育観について若干触れておきたい。というのも、彼が教育者や学者について触れている記述の中に、「路傍の人」に交わらないことの正当化に繋がるかのような部分があるからである。杏村は、『新潟新聞』に載った論文の中で、「国民の思想に影響するものはその時の学者の哲学に有らず。実は社会の組織なり、社会の実際問題なりとよように言いたる人あるが、これはある程度までは実際のことなり」⁽⁴⁰⁾として、学者がおこなう哲学的考察以前に、現実の社会問題の把握も重要であることを認めている。だが杏村は、現実には則りさえすれば大衆の意見によって社会が進歩すると考えていたわけではなかった。杏村は、「衆論によりて社会は決して進歩すべきものには有らず。真理の自由者、すなわち一偉人は実に社会進歩の推進者なりというべき」⁽⁴¹⁾であると主張する。なぜ「偉人」が「推進者」となるのか。それは、「文明が進めば進むほど個人と個人とは密接となり、群集心理は著しく社会を支配して、群衆は些少の暗示にも感動し易きもの」⁽⁴²⁾だからである。杏村は、一般大衆・国民について次のように語っている。

社会の民心は滔々として利害にこれ赴き、軽佻浮薄に傾いて醇厚なる人情を理解せず。奢侈と衒気とは世にあまねく流行して、道徳は利害の口実にのみ利用せらるるの世なり。敬虔心の欠乏せる国民は自重自任を解せず。真の自由を知らず。暗示に従い易し。扇動せられ易し⁽⁴³⁾

仮に大衆・国民についてのこのような杏村の理解が客観的な事実の把握として妥当なものであったとしても、そのような理解ができる杏村自身は、彼らとどこが

ちがうのか。杏村は、自分を「真理の自由者」の側に立たせて論じていた。ここには、以前の杏村自身の反省の言葉、気をつけるべきと自らを戒めている言葉そのままに、「他ヲ軽視スルコト、他ヲ侮慢スルコト」と同様のことをおこなっていると見られてもしかたのない杏村がいる。

そして、大衆・国民についてこうした見方をする杏村は、「自重自任」や「真の自由」を解し、「暗示」や「扇動」されないように、時勢・政治に関心をもつことを教育者に求めている。今後求められるべき「新しき教育者」は、世の中を憂い、情熱をもって、良心に従い児童を導くべきである、と。杏村は次のようにいう。

時勢を知り政治を解する教育者は、全身燃ゆるが如き熱烈の気を以て充滿せるが故に、身みずから時勢・政治を談論せずとも頑是なき児童はおのずからその勇気に薫化せらるるに至り、また正義に対する良心、鋭敏に国家の大勢を憂慮する念旺盛なるが故に、児童の品性を陶冶すべき方向を知り、児童の向こうべき職業の進路を指示し得べし⁽⁴⁴⁾

では、ここで語られているような「薫化」や「指導」のできるようになるために、「新しき教育者」に肝要なことは何か。それは教育者自らの人格の形成である。杏村は、教育者を育成する師範学校の目的を次のように語っている。

師範学校の目的は他なし。この教育者の人格を作るがためのみ。教育者の人格、換言すれば社会文明の公正なる批判的態度、これ実に容易に得るべからず。一歳二歳の歳月のよく養成するところに有らざるなり。師範学校は他の中等学校と全く別個の系統をなして独立するもの、けだし故ありとゆうべし⁽⁴⁵⁾

こうした杏村の観点からすれば、教授法の実習などは、師範学校の付随的事業に過ぎない。彼にとっては、教育者自らの人格によって児童に「薫化」「指示」する、その人格の形成こそが教育者の育成上最も重要なことであった。ただし、児童の指導は、教育者のみで事足りるわけではない。そこには学者が必要である。杏村は、教育者と学者が一致して協力するときに社会や文明が進歩する、と考えていた。

杏村によれば、社会・文明に対する態度が、学者のそれは「帰納的」であり、教育者のそれは「演繹的」とであると説明されている。この両者の態度の違いは、事物に対する着眼や考察の方法の差異として現れる。

学者の研究は常に専門の微に入り細に入り、他と全く無関係に一事物それ自体の意義を闡明ならしめんと努むと雖も、教育者の学に対する態度は常に総括的にして批判的なり。故に学者を代表する者は、全然その人格と離れたる学そのものたることを得れども、教育者を代表する者は、その人格そのものの他に何物をも得べからざるなり⁽⁴⁶⁾

学者になろうとする杏村は、「一事物それ自体の意義を闡明」することに努め、「人格と離れたる学」自体に専心する立場を目指しているということになる。これは、「社会進歩の推進者」として、進歩のための分析をおこなったり理論を構築する立場であり、「社会ノ改革者」のひとつのタイプとして理解してもいいであろう。だが、杏村のいうように、学者が「他と全く無関係に」事物の意義を闡明するとしても、そのことは常識や既成概念にとらわれないという意味ではあって、実際の社会問題から無関係にということではあるまい。たとえ一旦は純粹思想的に「他と全く無関係に」考察を進め、たとえば人格の意義が闡明されたとしても、それだけで社会改革ができたわけではない。そこでおそらく杏村は、学者だけではなく、人格的な実践者ともいふべき教育者の必要を主張するのであろう。

しかし、大学進学前既に、「私は学問という装飾などは持って居ないでも、確かに教育界の革命児になったと思います」⁽⁴⁷⁾とまで自負している杏村にはやはり疑問が残る。「真理の自由者」「偉人」であることや「他と全く無関係に」研究することと、「貴公子」として「路傍の人」から離れていることは別のことであろう。むしろ、純粹思想的に研究して事物の意義が明らかになっても、「路傍の人」から離れていては、その意義を社会問題に実践的に活かすことが難しいのではないだろうか。それとも、学者は意義を明らかにするだけで、その後はまったく教育者の仕事ともいふのだろうか。さらに、もしも杏村の言葉通り、国民は「軽佻浮薄」で、「偉人」が社会の進歩を促進するのだとすれば、その進歩は、どのようにして国民に進歩として理解され得るのか。その理解は、「暗示」や「扇動」によるものとはどこがちがうのか。そうした理解なくしては、たとえ教育者の人格による「薫化」や「指示」であっても、それらは結局「暗示」や「扇動」の結果と同様にはならないのか。

再び学校生活に眼を転じると、あいかわらず成績優秀で学業の方はすこぶる順調な杏村ではあったが、一時東京高師の卒業が危ぶまれたことがあった。というのも、彼は、国民道徳を担当していた教授亘理章三郎の授業に欠席しがちで、今日でいう単位不足の状態だったからである。そして杏村は亘理の忌諱に触れることになり、さらに教授会でも卒業の認否が問題になった。このことについて、東京高師の同窓である塚本文治は、「他の人々は此の欠席を土田君の国民道徳に対する考へ方或は思想と亘理先生の道徳論とは相容れない為であったのだと噂したのであるが、そうではなくて土田君としては新潟師範学校在学時代に十分国民道徳について勉強済なので再度同じ様な講義を聴くのは時間的に不経済であろうと考えられた為であることを当人が言て居られた」⁽⁴⁸⁾と語っている。人々の噂と、塚本の語る杏村本人から聞いたという話の、どちらが欠席の本当の理由かはわからない。ただ、新潟時代の教師土居の回顧によると、新潟では次のようなことがあったとされている。杏村の発起で土居が教科書を使つての三角法の課外授業をおこなった。ところが、その第二回目からは、はじめに言い出したはずの杏村だけが出てこない。久しぶりに出席した杏村に土居が欠席の続く理由を尋ねたところ、「土田君『第一回の講義を聞いて教科書を見ました所、今日までの所はみなわかりました。今日の所が一寸わからない・・・いや・・・一寸聞きたいと思つて出て来ました。』と、わからないを訂正した」⁽⁴⁹⁾とのことである。このことで不満の収まらない土居が、その日の講義の後に突然、杏村の休んでいた箇所から試験をおこなった。すると杏村は満点をとってしまった。以上の土居のはなしからすると、東京高師での国民道徳の欠席の理由としては、杏村自身が言ったとされる、既に勉強済みだから「時間的に不経済」ということも、まんざらなさそうなことではない。もっとも、もしそうだとすると、「一寸聞きたいと思つて」出席した土居の課外授業の場合とはちがって、正規の授業なのに欠席した亘理の場合には、本当になにも聞くことがなかったのであろう。もしもそうであれば、このことは、亘理という一教授の責任ではなくて、杏村が、国民道徳という科目そのものを見切っていたとさえいえることになる。「三崎日記」において、博物学からはもはや学ぶことがないといっていた杏村からすれば、そうしたこともありそうなことである。欠席の理由はともかく、この件に関しては杏村を支持する教授たちもあり、嘉納校長の決断で卒業が認められた（なお、杏村が発表していた

諸々の社会評論が一部の教授から問題視されていたことも卒業を危うくさせた理由としてあったようである）。

そしていよいよ東京高師の卒業が近くなった頃小学校の恩師藍原五三郎に宛てた手紙（1915（大正4）年1月1日付）に、当時の杏村の心境が次のように述べられている。

本年は愈々小生も当校を卒業する身と相成候が願れば何事の研鑽をなしたるか我れながら残念の至りに候 風雲の志は失せず候へども余りに自己の無力なるに失望致し候 この上はたゞ小生等は終生学生なるより外は無之候 一方に於いて社会的に活動しながらも一方に於いてはどこまでも学生としての修養が肝要と存じ居候 日本の思想界思へばこれ程幼稚なるものはなきにして志を得名を為さんとすればこの社会程たやすきのは無きにて候⁽⁵⁰⁾

前半では、「自己の無力なるに失望」と、杏村にしてはやや殊勝なことを書いているかと思うと、結局後半では日本の思想界を「幼稚」なものと断じていて、それにもまして自信にあふれた文章に落ち着いている。この手紙の続きには、

九月にならば出来得べくんば文科大学へ入学する考へにて候 それは同大学の官僚的なる同校へ入学せざれば図書館を他人には一切利用せしめざるにて候 今一つは同大学を出で居らずては博士に推薦せざることに候 将来博士になりたりとて何程のうれしさも無之候へど図書館の利用出来ざるは大なる苦痛にて候 これ程等の原因より止むを得ず同校へ入学する考へとなりたるにて候 さはいへ小生が文科に転じたりとて将来の目的がこの方面にのみ止まると御考へに相成らざる様願上候 小生は何処までも社会改良を目的として政界の活躍児となりたき所存は一日も忘れざるところにて候⁽⁵¹⁾

と書かれている。自分にはまだ学生としての修養が必要ではあるが、日本の思想界で名を為すのは難しくはない。ただし自分は博士になりたいのではない。あくまでも「社会改良」をめざして政界の「活躍児」となる。ここで杏村が、学問の道に進むことをたやすいと考えて進路を政界へ転じようとしたのか、それとも、父親の影響もあってもともと彼の志を果たす道として政界へ進む可能性も考えていたのかは定かではない。それでも少なくとも、社会改良を目指す「風雲の志」は消えず、その志を達成する自負心をもつ杏村がそこにいた。だが、その後杏村は、自負心と自覚のあいだの矛盾に直面することになる。

第四節 東京高等師範学校卒業から京都帝国大学進学までの時期

- アイデンティティの危機 -

1915（大正 4）年 3月に杏村は東京高師を卒業した。続く 4月、杏村は、いったん東京高等師範学校研究科に席を置き、半年後の大学進学に備える。この約半年間は、杏村にとって、極めて大きな意義をもつ期間となった。

卒業後の杏村は寄宿舎を出て間借りを始める。ちょうどこの頃の彼の生活を記した「彼の人達」（1915（大正 4）年 5月15日付）は、杏村自身が自らの抱える矛盾に気づき、それにどのように対処しようとしたかを理解する上で、非常に参考となる資料である。それによると、杏村は、引っ越した当初は本棚やテーブルを整え、壁に額面や絵はがきを貼ったりするなどの装飾に勤しみ、部屋を「貴公子」にふさわしい世界に改めようとしていた。そのような部屋の住人になって満足していた杏村は、あまり外に出かけたくなかった。それでも、東京高師の図書館を利用するために外出しなければならない。すると、学校への途中には「貧民の家」が建ち並び、つぎはぎの服を着た職人や泥だらけの子ども、野卑な唄を謡う子守などがいる。杏村にとって、そうした人々の中を歩いて行くことは、「自分の審美的要求に裏切りするやうで何となく胸のむかつく苦痛」⁽⁵²⁾であったという。というのも、「私の住んである世界はこの人達の住んである世界より甚しく美しいものの筈」⁽⁵³⁾だからである。しかし、と杏村は続ける。

併しながらさう考へるのも私の生活の初め一週間許りの間にしか過ぎなかつた。私には今までの考へが日頃の自分の襟懐と決断とを甚しく裏切るものであることに気がついて来た。一体私には彼の人達の生活を詛ふ理由が一つもない筈である。私には彼の人達を無智だと笑ひ彼の人達を醜だと誹る資格がない筈である。何故なれば、世界に彼の人達と同じ生活をし、彼の人達と同じ無智と醜とにある人がどの位の数あるか知れないのである。否寧ろ世界に彼の人達の数には彼の人達でない人の数よりも絶対多数を占めてゐるのである。私はその不完全な世界に生きてゐる。その無智の世界、その醜の世界に生きてゐる。仮りに自分が自分の住んでゐる八畳の座敷だけを精入れて装飾して見たところで、

私の住んである周囲の大きな世界が無智と醜とに満たされてゐたなら、私の美的生活、私の享楽生活にどれだけの光彩を加へようか⁽⁵⁴⁾

外の世界を「無智の世界」「醜の世界」として嫌い、自分一人そうした世界とは違う趣向を凝らした部屋に安住しているつもりでも、外の世界に住む人々こそが世の「絶対多数」を占める人々である。それらの人々とまったく交渉を持たずに生きられない限り、彼らの住む外の世界がそのまま、自分の生活のみが美的・享乐的であることは叶わない。ここで、杏村は、それまでの自分の生活が近視眼的・私情的であったことを認め、「次の瞬間に於いて私は生活と思想のこの矛盾に懊悩してみた」⁽⁵⁵⁾との言明に至るのである。そして、「絶対多数」の人々と同じく自分も結局は「不完全な世界」に住むことに気づいた杏村は、「彼の人達の生活を改造してやる。彼の人達の境遇を整頓してやる。それは実に予言者の尊い仕事である。義人の気高い事業である。私はその尊い仕事に自分の血を流して見たい。その気高い事業に額を破つて見たい」⁽⁵⁶⁾と考えるようになる。こうしてかつての「社会ノ改造者」になるという志が、改めて杏村に抱かれることになった。だが、今回の志は、以前のそれとは大きく異なっていた。

杏村は、「併しながら私はここに深く考へて置く要がある」⁽⁵⁷⁾と、慎重な態度でさらに考える。仮に渾身の力で改造の努力をすれば、理想の万分の一は叶うかもしれない。また、もしも叶わなくとも、少なくとも努力しているあいだは、自分自身は生きがいのある生活を送れるかもしれない。だが、そのようにして、

彼の人達の生活を改造し、彼の人達の境遇を整頓して、多少とも彼等に満足を与へ得たとして、ただそれは彼等の客観的の状態が幾分でもよくなつて来たといふだけのことではないか。彼等の主観的生活は依然として今の屈從的の卑屈にあるに違ひない。〔中略〕さうしたならば私の努力は結局無効無意義のものである。私の生活の周囲には依然として無智と醜とが遺る残つてゐる⁽⁵⁸⁾

ことになる。杏村のめざす社会の改造が、必ずしも他の人々も満足に値するものである確証はない。「彼の人達」の「客観的の状態」と「主観的生活」の違い。杏村にとってその違いについての気づきは、それまでの独我論的な社会改革の志の不十分さへの気づきであったといえるであろう。

さらにそのこと以外にも杏村と「彼の人達」を隔てていることがある。杏村は、自分と「彼の人達」の「生活の空気の違い」に言及している。

凡そ物に間隔があるといつても、彼の人達の主観的生活の空気と私の主観的生活の空気との間ほど甚しいものは他にあるまいといふやうな気が私にはする。何よりも彼の人達は私を別物にして、彼の人達の中から分離して置かうとする。又私もそれをよく知つてゐるから彼の人達の前を平然と通ることが出来なくなつてゐる⁽⁵⁹⁾

ふだん杏村が乗りつけている車夫は最近かなり杏村と親しくなってきた。それでもその車夫は、杏村のことを「別の階級のものと思ひ、別の資格のものに祭り上げ」⁽⁶⁰⁾がちである。また、杏村がよくその前を通る鍛冶屋があるが、そこまで来ると杏村は鍛冶屋で働く人々を正視できずに通り過ぎる。というのも、杏村には、その人々の「真黒な裸体の中から白い眼を猜疑に光らして、白い手の私を探るやうに見透かしてゐるのが私には堪へられない」⁽⁶¹⁾からである。さらに、杏村が道端でよく出会う漂浪者がいる。彼が漂わせている生活の空気は杏村のそれと融和できない異質のものであり、杏村は彼に生活の様式や人生観を聞いてみたい。だが、「仮にもそんなことを尋ねようとするならば、彼の人是一片の冷笑を後に残して大膽に歩み過ぎるであらう」⁽⁶²⁾から、それはできない。また、杏村は、旅行に出たとき、どれほど長く汽車に乗っていても、側の人に一言の挨拶もせず無言のまま旅することが少なくなかった。無言のまま杏村は何をしていたのか。

そんな場合私は労働者でも女でも子供でも、何とか話し掛けて彼等に接近したいと心では切に願つてゐるのであるけれども、彼の人達は私を別の空気に住んでゐるもののやうに等閑にする傾きがあるから、私は無理に物でも考へてゐるやうの風をしたり書物を出して見たりする虚栄心を見せてゐた⁽⁶³⁾

自分の「白い手」が見透かされるから、尋ねても「冷笑」されるから、杏村は「彼の人達」から自ら遠ざかるだけではない。杏村は、彼らに話しかけ、彼らに接近したいと「切に願っている」。だが、「彼の人達」がもつ「別の空気」は、「社会ノ改革者」たらんという志をもつて彼らに近づきたいと望むからこそ、杏村と彼らの間の乗り越えられない壁になっている。なぜなら、そこには「私の考慮し苦悶することは彼の人達にとつて全く意味のない遊戯のやうに見えはしないか」⁽⁶⁴⁾という心配、杏村の志のもつ根本的な意義が否定されるような現実と直面してしまうかもしれない心配があるからであった。

したがって杏村は「彼の人達」に「話しかけることができない」。

だが、改めていうまでもなく、このままでは「社会ノ改革者」たらんとする志は果たせない。杏村は、「貴公子」としていられた自分の生活を顧みる。

この静かな家でどんなに心ゆくばかり読書と思索が出来ようと言つて喜んでみたことも、友達一人訪ねて来ない寂寥を愛して自分の纏まつた芸術的生活が攪乱せられないのを希つたことも、今はすべて誤謬であることが判然と頭脳に印象せられた。私が彼の人達の生活と全く隔離して、孤独の生活を続ければ続けるほど私の生命は小さくなる。わたしの個性の燈明は絶え絶えになる⁽⁶⁵⁾

かつて杏村は、周囲から特別な存在として認められると同時に自らの優秀であることを信じ、学友から離れて一人思索に耽ることをよしとしていた。その時、彼に対する周囲の認識と彼自身の自覚は一致していたといつてもいいであろう。そして杏村のアイデンティティは、そうした自覚をもって、将来の「社会ノ改造者」や「学者」になるなどの確かな志に向けて進んで行くことにあった。だが今や逆に、彼が自負心をもって孤高に自分の道を行くことがアイデンティティを脅かしている。自分の道を行こうとすればするほど、救済すべき人々と自分を隔てている空気がはっきりする。もはや彼には、自分の気に入りの世界を創るかのように装飾した部屋が白々しい空間のように感じられ、そこでは落ち着いて読書さえもできない。では杏村はどうしたのか。彼は、「夜になると瓦斯の喘ぐ音が私を圧迫して、私に一種の恐怖の感情さへも起させる。せめてもの市街の中を彷徨して彼の人達と一緒に歩いてでもゐたなら、私の心淋しさは落ちつくかも知れないと思つて、〔中略〕おそくなるまで巷の往来に立混る」⁽⁶⁶⁾ような夜が続くことになったと記している。

だが、人々とただ一緒にいることで自分の寂しさを紛らわせようとして、あてどなく彷徨っても、アイデンティティを失いかけている杏村の心は容易には和まない。一時的に寂しさを紛らわせることができて、アイデンティティが保たれることにはならない。そうしたある雨の夜、帰宅するのに適当な電車がなかった彼は、雨の中を歩いて帰宅することになった。そして、

私はかう何か長い旅をして、汽船の転覆で海洋の中を幾日も漂流し、家に残つた家族は最早自分を死んで了つたものと思つて何処かへ去つて了つた空っぽになつてゐる自分の家へ歸つて来たやうな物悲しい気になつて、濡れた着物のままテエブルの上に泣き崩れて了つた⁽⁶⁷⁾

この次の日から杏村は、四十度以上の熱が続き、湿性肋膜炎にかかってしまう。

この時の病について柳沢昌一は、「この病はもちろん基本的にはひとつの身体的な障害であるには違いないが、〔中略〕それが『社会ノ改革者』『自由思想家』としての<同一性>崩壊の危機と照応していることは明らかである」⁽⁶⁸⁾と分析している。さらに柳沢は、「そこには、近代的な知識が一握りの知識人・官僚の手に集中し、それを持たぬ大半の民衆との間に個人の善意などでは容易に超えられぬような断層を生じつつあったという、急速な近代化の過程における日本社会の構造的な矛盾の反映をも見なければなるまい」⁽⁶⁹⁾と指摘している。この指摘を支持して、山口和宏は、「危機」について、それは「杏村ひとりの問題ではなく、近代日本において民衆を視野に入れた『社会改革』を志す『知識人』には共通に訪れる可能性のある『危機』であったともいえる」⁽⁷⁰⁾と、「危機」の共通性に言及している。たしかに、知識人が、民衆とは別の存在として自己規定することにアイデンティティの一端を求める場合、往々にしてこうした「危機」はおとずれることであろう。明治期にあったような、国家によって保護育成された知識人や、固定化された特権的身分・地位として形成された知識人の場合とは違い、各種学校やマス・メディアが普及した、いわゆる大衆社会的状況の出現とともに現れた知識人の場合には、そもそも民衆の存在が前提とされなければならない。なぜならば、大衆社会的状況下の知識人の果たすべき大きな役割には、民衆の日常的な生活の営みから発生した社会心理や未だ未発達な思想を、より普遍性をもった目的意識的な思想へとまとめ上げることがあったと考えられるからである。ところが、知識人の指導者的意識が強まり、自分たちが民衆とは没交渉に存在するかのように考え始めたとき、「断層」は拡がり、やがてアイデンティティの「危機」を招くことになる。そして、その場合の知識人の対応としては、後にプロレタリア文化運動が盛んになったときにしばしば見られたように、自らの存在基盤を獲得するために、自己を労働者階級の中に位置づけて新たな方向を模索すること、もしくは、自ら断層を拡げることを承知で学問的世界の中に沈潜していくことなどが考えられる。

では杏村の場合は、「断層」を乗り越え「危機」的状況にある自らのアイデンティティをいかに再構築するのか。「彼の人達」の最後は、つぎの文章で終わっている。

彼の人達と全く絶縁して静寂と孤独の中に私の生命を愛育しようとした私の行為は全然誤謬である。自分の病気が治つたなら出来るだけ早く私は彼の人達の仲間に加はらねばならない。そして日常生活の一々の行為の中に外界の反発を求め、苦しい戦闘と労作の中に自分の生命を拡大せねばならない。私は志士の襟懐と労働者の熱意とを平行して、私の評論の背景に彼の人達の生活の空気を充満せねばならない。私は革命者の十字架と戦士の血の中に私の熱意と同情とを培養せねばならない。彼の人達の中へ。ただ彼の人達の真直中へ。そして私の手には鋤と玄能と剣と十字架とを持つて⁽⁷¹⁾

こうして、以前嫌っていた「彼の人達」の空気を自らの評論に取り入れる必要を認め、そのための行動をおこす決心をした杏村は、病が癒えた後でそれを実行に移す。ただし、彼にとってその実行とは、知識人が自らを労働者階級として位置づけるかのように「彼の人達の仲間」に加わることではなかった。杏村の実行とは、京都帝国大学文科大学哲学科への入学であった。

第五節 京都帝国大学時代 - 「使命」の自覚によるアイデンティティの再構築 -

1915（大正 4）年 9月、京都帝国大学文科大学哲学科に入学した杏村は、住居を京都に移し、その頃東山知恩院山内崇泰院で絵画の創作をおこなっていた兄麦僊とひとまず同居する。当時麦僊は、友人の小野竹喬（この頃は「竹橋」）と共同生活をしていて、その生活に杏村が加わることになった。そして杏村は、麦僊を介して、竹喬、さらに村上華岳、榊原紫峰、野長瀬晩花ら、新進気鋭の画家達とも交流をもっていた。

この年哲学科哲学専攻には、杏村、務台理作、松原寛の三名が入学している。そのときの哲学科の教授陣には、西田幾多郎（哲学）、朝永三十郎（西洋哲学史）、松本文三郎（印度哲学史）、高瀬武次郎（支那哲学史）、深田康算（美学）、藤井健治郎（倫理学）、米田庄太郎（社会学）、小西重直（教育学）、野上俊夫（心理学）、斎藤唯信（仏教学）などがいた（その後杏村が三年生の時には、波多野精一（宗教学）が就任している）。その他に、助教授に千葉胤成（心理学）、助手に山内得立（哲学）や植田寿蔵（美学）などがいた。なお、言語学

科には新村出がいた。後に杏村の友人となり、杏村が力を注いだ自由大学の運営には特に欠かせない協力者にもなる高倉輝の指導教授がこの新村である。杏村は、自分の専攻する哲学の講義以外に、積極的に他専攻の講義にも出席していた。

その他学生としては、杏村入学時の三年生に篠原助市や岡野留次郎がおり、二年生には岡本春彦、河瀬憲治、染村亀鶴らがいる。ただ、同じ学生といっても、東京高師のときと同じように、杏村は入学時から目立つ存在であった。その理由のひとつには、杏村が、売り出し中の若手画家土田麦僊の弟であったということがある。また、その理由以外に、杏村自身が既に論壇に登場していたことがある。杏村と同時期に京都帝大に在学（英文学）していた矢野峰人は、「菊池寛は大正五年に英文科を出るや直に上京、時事新報社に入社、かたはら創作をも公にしてゐたが、その新作の一つを土田君が何かの月評欄で少々酷評したらしく、菊池が直にこれに、いさゝか口汚い調子で応酬したのを覚えてゐる。これなど、土田君が既に文芸批評家として売出してゐた事を示す一例と言ってよからう。また、土田君の存在が文学部教授間でも、かなり早くから知られてゐた事は、レポートか何かで『拙者第何ページ参照』とか附記してゐたのが話題になったのを、大阪の一新聞が茶話で伝へた事によつても知られる」⁽⁷²⁾と回想している。京都帝大進学前に既に東京で評論家としても活動していた杏村は、進学後も論壇での活動を続けていた。もっとも、評論活動をおこなうといつても、杏村自身は、京都帝大在学中に「昼となく夜となく、目覚むれば枕頭に雑然たる仏書や西洋現代の哲学書や文芸書を耽読し、疲れれば直ちに、臥して徒らなる午睡の夢を貪る。覚むるも眠るもたゞ読書と思索の外にはない」⁽⁷³⁾生活を送っていたといっている。杏村と共同生活を送っていた竹喬も、上木に宛てた私信の中で、杏村の学生生活が「寸時を惜しみ勉学また勉学という風」⁽⁷⁴⁾であったことを述べているように、杏村本人は自分の学生生活の基本をあくまでも研究においていた。では、それはどういった研究だったのか。

1917（大正 6）年に杏村は、千代子に宛てた手紙（5月24日付）の中で、次のように書いている。

あなたは私が非常に勇気がないやうに思つてゐるかも知れませんが、それはあなたが私の宗教的信念と私の健康とを御存知ないからです。私は私の恋も健

康もすべて私の宗教的信念のためにいけにへにしてゐるのです。〔中略〕私の生き甲斐あるのはその信念ためです。〔中略〕卒業後も隠者のやうにして辛うじて私の生活だけを維持して、全力を仕事につくすのです。〔中略〕いろいろのことから私が種々の責任を持つやうになつたら私は死ぬまで私の命ぜられてゐる仕事が出来ないで了ひませう。私は死の床でこの責務を果たさなかつた苦痛をどんなに受けませう⁽⁷⁵⁾

杏村にとっての「宗教的信念」のための「いけにへ」の仕事。自分に「命ぜられて」いる「責務」である仕事。自分のすべてを捧げるほどの仕事があることを述べてはいるが、この手紙では、まだその内容は明らかではない。それが明らかにされたのは、約二十日後にやはり千代子に宛てたの手紙（6月13日付）の中においてであった。

あなたは私が長く長く待つてゐたその人でした。今までの不徳な生活をはなれて行くにはあなたほどよい人がないのです。私の使命だと思つてゐる、人類に理想を与へること、（これは前にもいつた様に前の病気以来来^マつとして気づいて、私の生存理由となつてゐるもの、この使命の止むと同時に、延ばして貰つてゐる私の生命は絶えるのです。）それにはとても今のやうな不徳では駄目なので、ずつとずつと（とても今とは比較にならぬ程）修養しなければなりません、あなたは神が私に授けてくれた人です。私のやうに傲慢な〔中略〕負けず嫌ひの人間があなたの忠言にはきつとよく聞ひて、決しておこるまいと今まで言つてゐたでせう⁽⁷⁶⁾

杏村が千代子への自分の思いを綴る時、彼女に自分自身を理解してもらおうとして明らかにされた「私の使命」とは、「人類に理想を与へること」であった。そしてこのことは、彼の「生存理由」として自覚されていたほどのことであり、前者の手紙にあったように、「隠者」のような生活を送つても全精力を傾けて果たすべき「使命」であった。実際に、後の杏村は、できる限り時間や出費を節約して、執筆活動に没頭した生活を送っている。この時に自覚した「使命」は、彼の生涯に亘つて影響を及ぼすものであった。そして、以前「彼の人達」と杏村を隔てていた「断層」は、彼らの「客観的の状態」と「主観的生活」の違いに基づく認識されていたが、「理想を与へること」によって、杏村は、「彼の人達」の「主観的生活」に働きかけて「断層」を埋めようと考えていた。

「人類に理想を与える」という言葉は、「社会ノ改良者」をめざす杏村の意気込みとしては納得できても、考えや態度としては傲慢な印象を与えるかもしれない。なぜならそこには、「人類に理想を与える」ことの可能な、六年前と変わらず「絶対者」であり「超人」であると自認するような杏村がいるとも思われるからである。だが、自らの「使命」を自覚した杏村は、以前の彼とはちがっていた。この手紙の中で、自らを「不徳」や「傲慢」と述べていることにも以前とのちがいが伺えるが、それ以上に、「修養」や「忠告」の必要を認めていることが注目される。既に「絶対者」であり「超人」であるならば、もはや彼には「修養」や「忠告」の必要はない。ただ「彼の人達」の中に入り、彼らを導きさえすればよい。だが、杏村は、京都帝大進学を選択した。というのも、「私が兎に角京都へ来た根本理由は、一先づ文壇から絶縁して、自己を根底から鋳直す」⁽⁷⁷⁾ことだったからである。

人々に「理想」を与えることが可能であるためには、その「理想」が、与えるのにふさわしいものでなければならない。つまり、それは、与えるだけの価値をもつと同時に、与えるべき必然性を持ったものでなければならない。そうした二重の正当性をもつ「理想」、評価に値し批判に堪えうる確固とした「理想」を用意しなければならない。幼くして「学者」になる「つよい決心」をしていた杏村が、そうした「理想」を学問的に求めようとしたことは理解に難くない。だが、「社会ノ改良者」たらんとする杏村が、いわば学問のための学問をするかのように、「理想」を学問的な世界の中でのみ論じて終わるわけにはいかない。彼は、学問的に探求した「理想」を、「彼の人達」のところへ届けなければならない。そのために、杏村は評論をおこなう。アイデンティティの危機に直面した杏村は、自分の果たすべき「使命」を自覚し、「彼の人達」の中に入るための杏村なりの方法を見つけたことで、「危機」から脱したといってもいいであろう。今やその「使命」は、学問的に「自分を根底から鋳直す」ことから獲得した「理想」を人々に与えるべく文明評論をおこなっていくという、その方法が明瞭な「使命」として自覚されている。そして、このようにアイデンティティの再構築への方向性を見出したからこそ、東京高師卒業直後には自分の美しい世界観を反映させた部屋に居ながらも「彼の人達」のことが気になって落ち着いて読書ができないほどであった杏村が、京都帝大進学後はそれとはまったく逆に「覚むるも眠るもたゞ

読書と思索の外にはない」生活を送ることができるようになったと考えられる。

さらに、この再構築を契機に、杏村の「懷疑」が本格化したといってもいいであろう。新潟師範時代に「懷疑」の重要性を主張していた杏村は、キリストや釈迦の諸説さえも懷疑の対象とすることを語っていた。だが、当時の杏村は、そうした徹底した懷疑を主張をする自分自身への懷疑には至っていなかった。その後杏村は、「彼の人達」と接することで、それまでの独我論的な自分への懷疑が始まり、そのためにアイデンティティの危機に直面した。このように解釈すると、杏村の懷疑的思考は、危機に至ってはじめて、自分自身もその対象とする全面的・徹底的なものになったといえるであろう。換言すれば、かつての杏村は、自己を社会的秩序の中に埋没させずに、懷疑を基軸として秩序への違和感を発現しようとしたが、そのことは自分の属するのとは異なる「無智の世界」「醜の世界」の設定に留まっていた。しかし、そうした世界と没交渉に自らの違和感のみを訴えることの行き詰まりに直面した杏村は、その違和感を自己への懷疑として発現しようとする意識に至り、ついには「使命」というかたちでの彼の思想形成の契機を獲得した、ということができるといえるであろう。

そして、「使命」の内容である「理想」を学問的に追求しようとする杏村にとって、京都帝大哲学科はもっともふさわしい場所であった。当時の日本の哲学界は新カント派の理想主義哲学が全盛期を迎えていた。その哲学の研究において、特に先駆的立場にあった研究者のうちの二人、西田と朝永がそこにいたのである。しかも、ちょうど杏村の在学中に、西田は『思索と体験』（1915（大正4）年）や『現代に於ける理想主義の哲学』（1917（大正6）年）を、また朝永は『近世における「我」の自覚史（新理想主義と其背景）』（1916（大正5）年）を発表している。こうして杏村にとっての京都帝大進学は、場所としてだけでなく、時期としても適切であったといえるであろう。

京都帝大での学生時代、果たすべき「使命」が明確になった杏村は、日々の読書や講座への出席、さらに卒業論文の作成に精力的に打ち込んでいた。その論文の構想や、当時杏村が考えていたその後の研究の予定などが、1916（大正5）年の千代子への書簡（9月6日付）の中に見つけられる。その年の秋、二年生に進もうとしていた杏村は、

近頃は全く数学に没頭しています。時間空間のと世間とはまるで没交渉のことを考へてゐるのですから、世間から見たら随分空想家に見えるでせう。まづまづ休暇中に私の哲学の外郭のはんぶんだけが出来上がったのでうれしい気がします。もう一年の間にすつかり形を整へてその次一年には筆をとります。

〔中略〕科学の基礎を論ずるところは、うんと諸般の科学の専門的知識にはいつて論ずるので、今思想界にゐる人達には少しわかりづらいところが出来ませふ⁽⁷⁸⁾

と書いている。「使命」達成の希望を抱いた杏村は、自分の専門の哲学だけではなく、諸般の学問分野も視野に入れた研究をおこなおうとしていた。もっとも、広く根本から学問を究めようという意気込みは、学問的好奇心が旺盛で、実際のその分野における先行研究の進捗状況はよく知らないが、それゆえに自分で新たな研究領域を切り開こうという自負心をもち得るような初学者が、アカデミックな雰囲気に触れた時に触発されやすいものかもしれない。そして、野心的に壮大な研究を構想したものの、自分の研究が進めば進むほど、研究の実際の進行と当初の構想のあいだの差が開き、要するに自分の研究における理想と現実の差が開き、往々にして研究全体が挫折するか、もしくはそれを大幅に縮小することになりかねない。では、杏村の場合はどうだったのか。この後1917(大正6)年の千代子への手紙(8月21日付)には、次のように書かれている。

十分の時間といのちが欲しい。仕事がありあまるほどある。僕が順次に哲学、美学、倫理学、社会学、宗教学、経済学、法理学とうんと大きな根本の本を(一冊が皆菊判で千頁以上ある)書いて了ふだけ僕の命が続くだろうか。〔中略〕それに近頃仏教を研究してみると、この研究も僕でなければとても他の人に出来ないやうな気がする。〔中略〕各宗の宗教の哲理について書いて見たい。先人の研究には不満が多い。日蓮や法然の研究でも、まだ足りない。それに日本美術史も書きたい⁽⁷⁹⁾

ほぼ一年前には、科学の基礎を論ずるために専門的な内容に入るといふ、いわば論文の専門的な深さに言及されていたが、ここでは、哲学だけではなく、美学・倫理学・・・日本美術史と、いわば執筆の対象の学問的な広さに言及されている。以前の杏村の意気込みは縮小することなく、一冊が千ページ以上の「うんと大きな根本の本」の執筆を目指すまでに至っていた。彼の計画は、一見大風呂敷のよ

うに聞こえるかもしれない。だが、実際に生涯に亘って杏村のおこなった研究は非常に広範なものであった。彼が発表した多数の論文・評論はもちろんのこと、彼が著した六十余冊にのぼる著作は、少なくとも研究分野について、ここに予定されていた研究のほぼすべてを網羅している。かつて小学生の頃に「意志の力」を確信した杏村は、青年に成長して、自己の抱える矛盾と直面し、今度は「使命」を確信した。そしてその新たな確信にもとづいて、「使命」を果たすことにつながる諸々の研究を遂行していったといえよう。

ただし、杏村がおこなった研究の特質は、その範囲の広さだけではない。彼は、こうした研究を従来の正統的・伝統的な学問の中だけのものとしていたのではなかった。彼の研究は社会問題や人生問題の解決へと向かうものであった。このことは、京都帝大での杏村の指導教授であった西田幾多郎の哲学に関する態度と杏村の態度のちがいによく表れている。

改めていうまでもなく、西田は、大正から昭和へかけて日本の哲学界に多大の影響を与えた哲学者の一人として知られている。中村雄二郎が、「ギリシア＝西欧に発達し、永い伝統をもった知の普遍的形態として 哲学 をもち来たり、それによってきびしく日本や東洋の思想をはかるとき、文句なしに 哲学 の名を以て呼ぶ最初のものは、やはり西田幾多郎の哲学であろう」⁽⁸⁰⁾といているように、西田は、西欧哲学を学びながらも、それを啓蒙的な移入の哲学にとどまることなく、東洋思想の伝統の上に独自の体系を樹立しようと努めていた。「西田哲学」という呼称が一般化するほど、アカデミックな哲学者の第一人者として認められる西田は、杏村没の際に発表した弔文の中で、杏村について、

哲学の方面のみならず、経済とか、社会学とか、文学、政治、法律、美術そのほかの実に多方面にまでよく勉強せられて、相当に土田氏の考へをすすめてゆかれ〔中略〕、それから、日本の現代の哲学者とその仕事とを外国へ紹介するといふやうな、非常に面倒なことまでも煩を厭はずにやられてゐた。そして、いろいろの方面へも、絶えず哲学的な見方がずつと一貫してとほつてゐたやうであつた⁽⁸¹⁾

と述べている。なお、西田は杏村の《全集》の編集顧問の一人であり、またその《全集》の扉題簽や京都智積院墓地にある杏村墓の墓碑銘は西田の筆によるものである。

一方杏村にとって西田はどのような存在だったのか。三木清が西田の『善の研究』を読んで哲学を学ぶことを決心し京都帝大に進んだように、当時西田の著作は、哲学を志向する若者の間でよく読まれ大きな影響を与えていた。杏村もまたそうした若者の一人であった。彼と京都帝大の同学年であり東京高師の寄宿舎で同室でもあった務台が「土田君は西田博士については高師にゐた時分より多大なる尊敬をよせて居り、『善の研究』や雑誌『芸文』に出た博士の諸論文に注目して居つた。京都帝大を選んだのも一つは博士について直接の教を受けたいと云ふ願のあることも自分に語つた」⁽⁸²⁾と回想しているように、杏村は、京都帝大進学前から既に西田に私淑していた。また京都帝大在学中には、「今のところでは我が西田さんの上こそ思索家はいない。西洋の思想家と交へてもある点では西田さんの方が深い。恐ろしい人間だ」⁽⁸³⁾と語っているように、杏村の西田への尊敬の念は西田から直接教えを受けるようになった後も変わることがなかった。むしろ杏村自身の研究が進み、多くの西洋の思想家について学ぶことで、彼らとの比較が可能になるにしたがって、西田に対してますます敬服するようになったといつてもいいかもしれない。そして、京都帝大卒業後においても、「西田幾多郎は、日本が創つた最も高い哲学を語る時に第一に着眼しなければならない偉大な哲学者である。彼は広く極めるよりも深く掘る哲学者であつて、民衆は初めて彼の哲学から、哲学とは何よりも根底的な施策であることを学び得た」⁽⁸⁴⁾と、日本の哲学者として最大級に評しているほどであった。

このような杏村と西田を見ると、西田は哲学的思索を基盤にして多方面にわたって学識を深めていた杏村を評価し、杏村は哲学の偉大な先達西田を尊崇していたように思える。しかしながら、西田には、後年の「使命」に直結した杏村の活動にさほど注目していなかったふしがある。西田は、大学卒業後の杏村の研究について、「何か哲学の問題と社会的な方面の問題とを結びつけようといふやうな態度をとつて居られたやうである」⁽⁸⁵⁾とのややあいまいな認識をしていた。また、西田は、杏村の活動について、「盛んに社会的にも活動せられて、農村問題とか、教育問題とかいふやうな実行的なこともやつてみたやうだが、それらのことに就いては、私はすこしも知らない」⁽⁸⁶⁾と述べている。杏村は続々と著書を刊行していたし、また雑誌や新聞での評論の発表はたびたびのことであった。そこで、たとえ杏村が大学を離れた後であっても、西田が杏村の作品と接する機会があった

と推測できる。実際、西田自身、少なくとも雑誌『セルパン』に掲載された杏村の論文を目にしていたと語っている。それでも、以上のように述べている西田は、杏村にとっては最も重要な「使命」としての社会改革の試みについては関心が薄かったのであろう。

これに対して、杏村の方も、西田からやや距離をとっていた様子があった。杏村は、新聞紙上で西田がおこなった座談会を次のように評している。

〔西田の〕考察の前には泰山が崩れようと社会が破壊しようと、そのために動揺せしめられるものではないといった禅的風格が見える。この座談会に於いても先生のこの態度は自身の体系を語るに急であり、列席者の疑問を徐るに導くことに興味を持ったものではなかった。それがまた西田哲学の一風格であるから已むを得ない。ここに私などの希望することは先生の若い門弟の中から先生の哲学の一般的解説をなすものや、この哲学を現代社会の生きた問題に結びつけて行くものやの輩出することである⁽⁸⁷⁾

ここで杏村は、列席者の疑問を解くようなことには興味のない、西田の考察にある「已むを得ない」「禅的風格」を認めている。そのために杏村は、西田哲学についての「一般的解説」や、それを「現代社会の生きた問題」に結びつける門弟が出ることを希望する。換言すれば、杏村は、西田哲学は未だ現実問題に結びついているとは言い切れない、という自分の意見を語っている。しかも杏村は、自分がそうした役割を担うのにふさわしい門弟ではないことを前提とするかのような立場から評論しており、彼が、自分自身を、西田哲学の正統な学問的後継者としては考えていなかったであろうことが理解できる。

それでは、杏村と西田の違い、彼らの間に距離おく原因は何か。京都帝大時代杏村は、伝統的な大学アカデミズムの世界から現実社会に眼を向けない学者たちを疑問視し、彼らは「じぶんといふものを露骨に出して、自分の問題として悶えてゐるのは気に入らない。学問的でなくて通俗的だと思つてゐる」⁽⁸⁸⁾と評していた。そして、そうした学者から「通俗的」であるとして評価されない人物として、文芸評論家高山樗牛を例に出している。杏村からすると、

大学教授や博士で樗牛をほめる人を見たことがない。皆なあれはただの感情家だとか、文章でごま化しているとかあふ。〔中略〕それでも〔樗牛は〕随分読書はして努力してゐる。読書の点では却つて今の大学教授が同じ年齢頃によ

んだよりは多くよんである。そして何よりも樗牛は人間だ。人間味がある。そこが貴いのだ。学問、所謂物知りになつて何の貴さがある⁽⁸⁹⁾というのである。ただし杏村は、単に「通俗的」であることをよしとして、「学問的」であることを否定しているのではない。もしもそうであるなら、彼には、京都帝大進学を選択して、人々に与えるべき「理想」を学問的に鍛え上げる必要はない。杏村は、樗牛や西田と比較しながら、自分自身について次のように語っている。

〔自分は〕樗牛よりはずつとじみにいつてあんなにセンチメンタルにならんで、深いけはしいタイプに進むのだらう。あんなに多くの読者を得ないかはりに〔中略〕少数の読者を得る人間になる。が又高い少数の読者を得て深くけはしいといふ点では僕は西田さんに生涯及ぶまい。が又西田さんに比しては人間味が多くて樗牛の方に近いだらう⁽⁹⁰⁾

杏村は、社会改革者として、「今後大分資本家階級に対して反省を与へて、世間の憐れなるものや貧しいものにつくしたいと、大分社会問題の火花を散らすつもり」⁽⁹¹⁾でいる。そして、そのためには、「沢山世の憐れな実例を新聞記事などであつめ、極く分りやすい文章で、経済生活や文明の意味をかいて、何故貧民を救済しなければならぬかといふ理由を極く感銘を与へる文体でかき、社会改造の方法として西洋で行はれてある実例など」⁽⁹²⁾を書く必要がある。自分は、憐れな者貧しい者に尽くすために、資本家階級に「反省を与え」るべく、「火花を散らす」ほどの議論をおこなって、世に改革を訴えかけていきたい。その時、当然議論には打ち勝っていかなければならない。そのためには、議論の相手を納得させられるだけの、思想的・理論的な強さをもった、経済生活や文明の「意味」、貧民救済の「理由」が用意されていなければならない。さらにその議論を、知識人の間だけのことで終わらせずに、世論の形成に影響を与えるほどのものにする必要がある。そのためには、知識人以外の世の多数を占める人々にも「意味」や「理由」に関する議論を理解してもらわなければならない。そこで、新聞に載るような身近な「憐れな実例」や、身近ではないかもしれないが社会改革の方法として参考のできる西洋の「実例」を挙げ、しかもそれを「感銘を与える文体」で書く必要がある。つまり、杏村には、「学問的」であることと「通俗的」であることが相反せず、それら両方ともが必要なのである。

さらに、「学問的」であることと「通俗的」であることは、そうした方法論的に重要であるだけではない。東京高師で生物学を学び、京都帝大では哲学を学ぶ杏村は、その他にも、数学・物理学・文学その他諸々の学問を学ぼうとしていた。その分野的広がり、杏村自身が、「学問といふ学問は殆ど皆学んで来た」⁽⁹³⁾というほどであった。それはなんのためか。彼は、「私の本領はただ人生の謎を解かうとしてゐるだけなのです。いろいろの科学もただそのためのものなのです」⁽⁹⁴⁾と語っている。「理想」を考究する時、それと不可分な「人生」の探求を避けて通ることはできない。むしろ、「謎」に満ちた人生の方こそが、解くべき最大の課題といってもいいかもしれない。そして、「学問的」であることと「通俗的」であることは、そうした人生のそれぞれの側面であって、どちらか一方の面のみで、「謎」の全体を見たことにはならない。杏村にとって「学問的」であることと「通俗的」であることは、解き明かしたい「人生」の「謎」のそれぞれの部分であり、杏村自身、そうした両面をもつ人間として「人生」の中にいる。

先に杏村は、西田を「広く極めるよりも深く掘る哲学者」と評していた。西田は、これとは極めて対照的に「君の著述は、非常に深いとか根柢的に基礎付けられて居るとかいう様に考へられなかったかも知れないが、いづれの方面に於ても独自の考を有つて居られ、それぞれの方面に刺激を与へられたと思う」⁽⁹⁵⁾と杏村を評している。杏村にとっての哲学は、常に自分の思索を支える基盤であった。そうした杏村からすれば、西田は、日本で第一に着目すべき哲学者であった。だが、「使命」をもつ杏村の進むべき道は、西田と同じ道ではない。杏村の道は、大学の外に向かっていた。彼を「象牙の塔に籠るよりも寧ろ街頭の人であった」⁽⁹⁶⁾と評する西田はまた、杏村を「街頭の思索者」と称している。西田を大学で学問として哲学を究める「哲学者」とするならば、彼とは哲学という共通点をもちながらも、学問としての哲学を究めるのと同様、もしくはそれ以上に「使命」の達成が重要な杏村は、「哲学者」というよりもむしろ西田の言葉のように「思索者」と称されることがふさわしいといえるであろう。

京都帝大の一部の教授には、杏村を快く思っていなかった者があった。杏村が、学生でありながら著書を出すことや、自分の専攻する哲学以外の分野にも口を出すことが、彼らの反感を生じさせたようである。しかし、彼らとは逆に、むしろ

そうした杏村の姿勢を他分野から新鮮な空気を吹き込むこととして好意的に理解する者もあった。たとえば、西田と同じく杏村の《全集》の編纂顧問の一人であった新村出がそうである。新村は、『大阪朝日新聞』（1934（昭和9）年5月2日）に寄せた弔文で次のように書いている。

杏村君の著書の夥しく存する中〔中略〕、その一小部分に属する国文学関係の研究業績が、当代の国文学界を補益し後世にいたるまで永く同君の識見を記憶せしむるに足るものであることは、肯首してよいと思ふ。〔中略〕従来の国文学の研究に向かつて一石を投じ、あるひは型をこはし格を破るやうな、いはば破邪革新的な方面に進んで来て建設の中道にして挫折したやうな趣がないでもなく、もう少し気永に期待してみたかつたやうな感が自分たちには甚だ深いのである。〔中略〕時にこの種の学徒が他山より巨石を投じて国文学の旧殿堂を破壊するなり新殿堂の礎石に供するなりすることは、まことに望ましいところであるが、この人他界したかの人去らんとするがごときは、ことに京都の学壇のために惜しみてあまりあることである⁽⁹⁷⁾

新村は、国文学についての杏村の造詣の深いことを高く評価して、大学卒業後の彼に講演を依頼したり、学位論文の提出を勧めたりしていた⁽⁹⁸⁾。

また、大正から昭和にかけて長野県を中心に展開された自由大学運動に協力した杏村の友人たちには、高倉輝をはじめ、アカデミックな学問にとどまることに飽きたらず、既成の大学以外に学問やその実践の場を模索していた者がいた。そして、彼らの中には大学よりもそうした場での講義や議論の方に充実感を感じる者もいて、高倉などは、自由大学の仕事に本格的に取り組むために、長野に転居したほどであった。彼らもまた、杏村と同じく、「象牙の塔に籠もる」ことをよしとしていなかった。ただし、そうした人々の中で、実際に生涯特定の大学に奉職せず、在野にありつづけたのはほとんど杏村一人であった⁽⁹⁹⁾。

アカデミックな哲学を思索の基盤としながらも、正統的・伝統的な学問にとどまることなく、さらには、専門的な領域にもとどまらなかった杏村。その意味でも、西田の称した「街頭の思索者」は、杏村を語るにふさわしい言葉であった。

1918（大正7）年7月、杏村は京都帝大を卒業した。彼の卒業論文「現代哲学序論 - 認識の現象学的考察」は、大学ノート十四冊に及ぶものであった。続いて京都帝大大学院に進んだ杏村は六年間在学し、「使命」のために研究を継続しな

がら、同時に以前にもまして多方面にわたる本格的な評論活動を始め。

註

1 たとえば、上木が個人的に発行していた研究雑誌『土田杏村とその時代』がそうである。なおこの雑誌について、本論では上木の没後に新たにいくつかの補稿が加えられ合本された、上木敏郎編著『土田杏村とその時代』[新潟県佐渡郡新穂村新穂村教育委員会編集発行、1991年](非売品)を使用している。そのため、以降本論では、上木敏郎編著『土田杏村とその時代』は、合本されたそれをさす。

ところで「杏村」という号についてであるが、次の上木の研究によると、土田茂が尋常小学校四年の頃に、文学を愛好する彼の友人、本間徳太郎、中川覚治らと雅号をつくろうというはなしが出て、その時に「杏村」が誕生したようである。ただし、小学生の土田茂が、実際にどれほど頻繁にその号を使っていたのかはわからない。またその号の由来については、後になって杏村の語ったところによると、杏村の実家に杏の木があって、彼は幼い頃にその木陰で遊んでいた印象が強く、郷里を思い出すときにはいつも我が家とともにその杏の梢が思い出される、そうした感傷的な気持ちから杏村と名づけた、とされている。

上木敏郎「“杏村”号の由来」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、3ページ。

2 土田杏村「兄麦僊の少年時代」(《全集十五》、初出1930年)、147ページ。

3-4

同前、148ページ。

5 土田杏村(長谷川巳之吉編纂)『妻に与へた土田杏村の手紙』、第一書房、1941年、189ページ。

6 同前、190ページ。

7 土田杏村『草煙心境』、第一書房、1929年、72ページ。

8 田辺汎「佐渡・新潟時代の思い出」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、269ページ。

9 小柳信助「新潟時代の思い出」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、

11ページ。

- 10 井上桂「思ひ出」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、298ページ。
- 11 山岸徳平「土田杏村さんの思出」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、309ページ。
- 12 小柳信助「新潟時代の思い出」、13ページ。
- 13 土田杏村「絶対他力教に対する疑問」(『新潟新聞』、1910年6月22日から28日まで掲載)[渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』(非売品)、1996年、転載]、40ページ。

なお、この『土田杏村と新潟新聞』は、杏村と同郷であった渡辺光弥が、現在では入手することの難しい当時の『新潟新聞』に掲載された杏村の論文を収集、さらに時代の経過とともに傷みが進み読解が困難な同紙紙面を解読し、後学のための記録を残そうとした編著書である。

- 14 同前、40～41ページ。
- 15 同前、41ページ。
- 16 同前、42ページ。
- 17-18

土田杏村「不徹底語」(『新潟新聞』、1910年6月29日から30日まで掲載)[渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』、転載]、53ページ。

なお、清沢満之の精神主義に関する先行研究には、たとえば、吉田久一『清沢満之』(吉川弘文館、1961年)や宮川透「日本思想史における《修養》思想 - 清沢満之の『精神主義』を中心に - 」(吉田光他編『近代日本社会思想史』、有斐閣、1971年)などがある。清沢の他力信仰がただ他力にすぎることを説くものではなかったことを指摘しているこれらの研究を参照すると、杏村のその信仰についての理解は必ずしも妥当なものではなかった。

- 19 土田杏村「絶対他力教に対する疑問」、38ページ。
- 20 小柳信助「新潟時代の思い出」、13ページ。
- 21 土居音三郎「土田茂君の思い出」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、34～35ページ。
- 22 「恩師藍原五三郎宛の杏村書翰(上)」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』、収録)、61ページ。

- 23 土居音三郎「土田茂君の思い出」、35ページ。
- 24 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』、誠文堂新光社、1982年、28～29ページ、の転載から重引。
- 25 土田杏村（長谷川巳之吉編纂）『妻に与へた土田杏村の手紙』、242ページ。
- 26 杏村が丘から受けた影響は、博物学の専門的な内容に関するにとどまらず、学問を研究し問題を考察する際の態度にもあった。杏村が、

理科の教育に於いて「疑いの教育」の足らざることを、博士丘先生は極言せらる。観察に於いて講義に於いて、教師は自己の知識を生徒に単に注入するのみにして、生徒の理科的態度を教育せんとせず、即ち生徒が物象に対しすべて疑いを以って見るの教育が欠けたりというような意味なりしと覚ゆ（土田杏村「新時代の教育観」（『新潟新聞』、1913年 5月16日）〔渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』、転載〕、249ページ）、

と述べているように、彼が丘から学んだ「態度」は、教育にも通じる根本的な思索の「態度」であったといえるであろう。

なお丘に限らず、当時の東京高師の教授陣には、実際に優秀な人物が多かったようである。同校に在学していた福原麟太郎は、「大体、偉い先生が多かった。そのころ高等師範は帝国大学に次ぐ学校で、帝国大学の教授に将来なるべき学者のプールであった。高等専門学校の筆頭で、四年制ではあり、帝国大学と高専との中間にある学校だといわれていた」（福原麟太郎「大塚の学校」（『福原麟太郎著作集第六巻』、研究社、1969年、初出1965年）、84ページ）と語っている。

- 27 当時王堂は、杏村に目をかけていて、機会のある毎に積極的に彼を世に紹介していた。一方杏村は、理論と実践の統一、学術と功利の融合をめざして批評活動をおこなう王堂を、日本で最も重要な文明批評家のひとりとしてとらえていた。たとえば杏村は、王堂がおこなう批評を次のように評している。

田中は徹底的の現実主義者であり、また同時に徹底的の個人主義者である。だから彼は、現実が含んである志向のすべてを公平に鑑賞し、そのどれ一つでも理由なく排斥しようとはしないし、また自分の要求の中に含まれない、自己に超越的のものを、どれ一つでも唐突的に受け取らうとはしない（土田杏村『日本支那現代思想研究』、第一書房、1926年、185ページ）。

福原が杏村について、「思想は実際、王堂式プラグマティズムに、彼の主任教授であった丘浅次郎先生の生物学的哲学を加えて、はなはだ尖鋭であった」（福原麟太郎「土田杏村」（『福原麟太郎著作集第五巻』、研究社、1968年、初出1935年）、222ページ）といているように、東京高師時代に杏村が最も直接的に影響を受けたのは、丘に並んで王堂からだった。

28 石田茂作「偉大な先輩と虫けら程の私」（上木敏郎編著『土田杏村とその時代』）、357ページ。

29 「土田茂君」（『雄弁』、1914年、新年号）、401ページ。

30 中川杏果「杏村のこと」（上木敏郎編著『土田杏村とその時代』）、100ページ。

31 「杏村日記抄（大正 2年 3月 2日）」（上木敏郎編著『土田杏村とその時代』、収録）、101ページ。

杏村は社会全体に関わるような大きな問題にのみ眼を向けていたわけではない。その頃の東京高師では外出時の制服着用が義務づけられていた。それをあまり意味のない規則と考えた学生たちは、杏村を中心として規則の廃止を要求し、その結果和服に袴での外出ができるようになった。この経緯を知る福原は、「土田杏村という人は、〔中略〕生活改善について常に意見を持ち実践を怠らなかつた人で、その頃から彼の愛好したことは文明批評をあらゆる方面に向けて発射して、そういう実践への思想的根底を示すことに一生懸命の人であった」（福原麟太郎「土田杏村」、220ページ）と述べている。杏村は、こうした身近な生活改善にも眼を向け、また、遊郭からの救出にせよ制服着用廃止にせよ、思索だけで終わることなく、かなりの行動力をもって改善のための実践もおこなっていた。

32 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』、30ページ、の転載から重引。

33-34

土田杏村「三崎日記」（『靈魂の彼岸』、聚英閣、1920年、初出1914年）、112ページ。

このように博物学を軽視する発言をしていた杏村ではあるが、進学に当たって自らおこなった博物学の選択を完全に無意義なこととしたわけではなかつた。京都帝大に進学後、杏村は、博物学で学んだことをもとにして『生物哲学』と

いう著書を発表している。その中には、「生物は生れる。生物は死ぬ。生れては死に、死んでは生れる生物とは一体何であらうか。〔中略〕我々は宇宙そのものの神秘に心ひかれて哲学に科学にいそしむとするならば、先づこの生物界の神秘を解釈する責任をも持たねばならぬであらう」（土田杏村『生物哲学』、東亜堂書房、1916年、1ページ）と記されている。東京高師在学中に紆余曲折はあったかもしれないが、哲学に入る前に「人そのものの解釈」をおこないたかったという博物学選択の当初の理由は、忘却されずにいた。

- 35 土田杏村「三崎日記」、113ページ。
- 36 同前、115～116ページ。
- 37 土田杏村「黄金時代の一部より」（『新潟新聞』、1914年 6月13日）〔渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』、転載〕、271～272ページ。
- 38 土田杏村「三崎日記」、118～119ページ。
- 39 土田杏村「絶対他力教に対する疑問」、44ページ。
- 40 土田杏村「新時代の教育観」（『新潟新聞』、1913年 4月30日）〔渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』、転載〕、209ページ
- 41 同前、213ページ。
- 42 同前、213～214ページ。
- 43 同前、217ページ。
- 44 同前、220ページ。
- 45-46
同前、223ページ。
- 47 土田杏村「教育界の故老に与う」（『新潟新聞』、1914年 6月16日）〔渡辺光弥編著『土田杏村と新潟新聞』、転載〕、276ページ。
- 48 塚本文治「土田杏村氏を偲ぶ」（上木敏郎編著『土田杏村とその時代』）、272ページ。
- 49 土居音三郎「土田茂君の思い出」、34ページ。
- 50-51
「恩師藍原五三郎宛の杏村書翰（下）」（上木敏郎編著『土田杏村とその時代』、収録）、91ページ。
- 52-53

- 土田杏村「彼の人達」(《全集十四》、第一書房、初出1915年)、65ページ。
- 54-55
同前、66ページ。
- 56-58
同前、67ページ。
- 59 同前、67~68ページ。
- 60-63
同前、68ページ。
- 64 同前、69ページ。
- 65 同前、69~70ページ。
- 66 同前、70ページ。
- 67 同前、71ページ。
- 68 柳沢昌一「自由大学運動における自己教育思想の形成過程」(社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習・自己教育の思想史』、雄松堂、1987年)、215~216ページ。。
- 69 同前、216ページ。
- 70 山口和宏「土田杏村のユートピア」(上杉孝実・大庭宣尊編『社会教育の近代』、松籟社、1996年)、130ページ。
- 71 土田杏村「彼の人達」、73ページ。
- 72 矢野峰人「土田杏村君の思ひ出」(上木敏郎編著『土田杏村とその時代』)、359ページ。
- 73 土田杏村『靈魂の彼岸』、1ページ。
- 74 小野竹喬私信(上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』)、40ページ。
- 75 土田杏村(長谷川巳之吉編纂)『妻に与へた土田杏村の手紙』、91ページ。
- 76 同前、132ページ。
- 77 土田杏村『靈魂の彼岸』、2ページ。
- 78 土田杏村(長谷川巳之吉編纂)『妻に与へた土田杏村の手紙』、19ページ。
- 79 同前、258~259ページ。
- 80 中村雄二郎『西田幾多郎』、岩波書店、1983年、20ページ。
- 81 西田幾多郎「土田杏村の哲学的出発」(『セルパン』土田杏村追悼号、

1934年 6月)、 3ページ。

ここで西田が触れている、杏村が日本の哲学者やその仕事を外国へ紹介していたという「紹介」とは、まさしくその目的で杏村が著した‘ Contemporary Thought of Japan and China ’, London:Williams and Norgate, 1927. を指していると理解していいであろう。この作品は、杏村自身が邦訳して、『日本支那現代思想研究』という題で英文原著に先行して1926年に発行された。

1919(大正 8)年から京都帝大に奉職していた田邊元は、この杏村の著書について、次のように書いている。

序文を拝見して材料の蒐集選択、敘述の方針体裁等に如何ばかりの苦心を払はれたかをお察して、一年間にこれだけのものを英和両文でお纏めになつた御精力に敬服しました。(中略)本文中講壇哲学者に対する御批評、貴下御自身の社会哲学的思想の敘述に刺激と啓発とを受けること少少ではありませんでした。講壇哲学が一般に現実の社会生活に対し無関心の態度をとり、それが為め社会改造の運動に力を与へることが出来ないといふ非難は痛切に感ぜられました。(田邊元「土田杏村『日本支那現代思想研究』について」[『田邊元全集第十四巻』、筑摩書房、1964年、]、 357ページ)。

そして田邊は、自分は社会から離れた個人を抽象的な主体とするつもりはないが、それでも杏村の指摘する社会改造に寄与できない講壇哲学の欠点を自分ももっていると記している。

82 務台理作「土田杏村の哲学」(『セルパン』 土田杏村追悼号、1934年 6月)、 9~10ページ。

83 土田杏村『妻に与へた土田杏村の手紙』、 341ページ。

84 土田杏村『日本支那現代思想研究』、98~99ページ。

85-86

西田幾多郎「土田杏村の哲学的出発」、 3ページ。

87 土田杏村「西田哲学の時代的意義」(《全集十五》、第一書房、初出1932年)、 235ページ。

88 土田杏村『妻に与へた土田杏村の手紙』、 220~221ページ。

89 同前、 300ページ。

なお、樽牛について、杏村自身は次のように評価している。

彼は僅かに三十数歳の短い生涯を送つたに過ぎないし、その主張も決して体系的のものでなく、単純のものではあつたけれども、多分の感傷主義を交へたその懐疑的な主張と情熱的の文章とは、同じい思想的の傾向にあつたその時代の青年の心緒を動かし、彼の影響は従来に見ない大きなものであつた。〔中略〕今後多くの思想的天才が現れるにせよ、短い生涯の間によく時代の要求を表現し、時代を率ひ得ること、高山の例の如きは少ないであらう。

(土田杏村『日本支那現代思想研究』、80~82ページ)。

杏村が樗牛に見る「感傷主義を交えた懐疑的主張」や「情熱的な文章」は、「理想」を「彼の人達」のもとへ「感銘を与える」文体で届けようとする杏村にとって、大いに共感できる部分であつたと推察できる。

90 土田杏村『妻に与へた土田杏村の手紙』、342ページ。

91 同前、224ページ。

92 同前、224~225ページ。

93-94

同前、7ページ。

95-96

西田幾多郎「街頭の思索者」(《全集三》、箱(ハードケース)に印刷)。

97 新村出「土田杏村君を悼む」(『大阪朝日新聞』1934年5月2日)[『新村出全集』第十四巻、筑摩書房、1972年、転載]、469~470ページ。

98 杏村は、新村出、吉沢義則両教授のすすめで、1929(昭和4)年に京都帝大に「上代の歌謡」を主論文とした学位申請の手続きをしている。学位認定の経過は明らかではないが、一部からの強行意見と学内事情のため、結局申請は認められなかった。

99 京都帝大に入学して哲学を学ぶという明確なプランをもっていた杏村だが、入学後、哲学についてはともかく、京都帝大については、「図書を借覧する都合より心ならずもこの官僚大学に籍を置く次第に御座候」(土田杏村「共鳴五感」(『第三帝国』第75号、1916年9月)、29ページ)というように、しばしば批判的な既述をおこなっている。生涯在野にあらうとした杏村の片鱗が大学時代に既に伺える。

なお杏村には、大学へ奉職する機会がなかったわけではない。既に本論にお

いて使用している『妻に与へた土田杏村の手紙』について、これは、1934（昭和9）年に杏村が没した後、生前杏村から彼の妻となった波多野千代子宛に出された書簡類がまとめられ、長谷川巳之吉の編纂で1941（昭和16）年に第一書房から出版されたものである。ここに収録されている書簡類は、1916（大正5）年5月28日付のものから、1917（大正6）年11月2日付のものまで、全135通分である。これらの書簡が出された時期は、ちょうど杏村が京都帝大哲学科に在学していた時期の約半分の時期のに相当し、当時の杏村の生活を知るよい手がかりとなる。この書簡集によると、1916年9月頃に杏村は、「官学の人となるか、ただの自由の批評家として立つか」（23～24ページ）ということに悩んで、気分がふさいでいると書いている。ただ、悩みといっても、このことは、無事官学に奉職できるかどうか心配ではなかった。それは、東京高師の恩師、おそらくは嘉納校長あたりが杏村の奉職を後援していて、杏村が「こんなに自分を信じてみてくれるものをもと思つて世間の人がいろいろ同情を与へてくれるのに感涙を催し」（24～25ページ）たと記しているように、自分に対する気遣いをありがたく感じながらも、奉職すべきかどうかを悩んでいたのがあった。この件で、杏村は、京大総長をはじめ複数の教授たちを訪ねているが、結局、結論は出なかった模様である。もっとも、結論が出そうにないとわかった時点で、かえって杏村の悩みは吹っ切れたようで、「まづ僕のやうの人はフリーマンになつて野の人となつた方がいいのですよ。その方がどんなにか気がのびのびするかしれません。学のための学といった風に古典を一々読んでそれを負つて歩かねばならぬ学者といふものはみじめなものです。といつて私はまるで読書もしないでただの空論をやつてゐる東京の文士先生達は嫌ひです」（27ページ）と書いている。